引き込みを待つてゐると、續いて一寸、二寸、三寸と糸が引き込まれて行きますから、頃合ひを見計らつてグイッと一氣に引き出してしまふのです。こゝで躊躇してゐると尻尾を穴の奥にからみ附けて抵抗しますので、なか〳〵出て來なくなつてしまひます。さうして引き拔く時、左手を穴の口に當てて待ち構え、頭が出たところですぐ顎の下をギュッとおさへるのですが、初めのうちはなか〳〵うまく行きませんから、糸ぐるみ安全な岡へほうり投げてしまひ、後から追つかけて行つて捕まへる方が無事かもしれません。

以上が、普通一般に行はれてゐる穴釣ですが、もう一つ一二尺の竿の先にヒゴ竹をしつかり結び附け、そのヒゴの先端に鈎を結びつけた仕掛を用ひる所があります。これですと道糸の必要は全然なく、ヒゴ竹の柔軟性が役立つて、かなり曲りくねつた穴の中に入つて行くので具合がよいものです。又鯨の鬚を細く削つて、ヒゴ竹の替りにつけてゐるのも見かけましたが、此の方が柔かくもあり、しかも丈夫なので一層具合がよいと思ひます。何れにせよすべて自製道具で釣るところに、一入の興味があると思ひます。日中よりは朝夕のまづめがよいのですが、炎暑の殘る日暮れ方の一刻を清流に浸つて釣歩くのは、なか〳〵悪くないものですし、それを夕餉の膳に上せれば又一層の喜びが得られるといふものでせう。さうして老父が晩酌の肴に舌鼓を打つてくれることなど考へると、釣は二重にも三重にも功徳を與へてくれるではありませんか。

鯰（ナマヅ）釣

鯰について

鯰も鰻と同じくほとんど全國的に棲息してゐる魚で、お馴染の事と思ひますが、鰻のやうに海には降らぬ純淡水魚です。地震の親玉として、又あの大袈裟な髯などから、何かユーモラスなものを感じさせますが、こいつなか〳〵怪しからぬ不良性を持ち、晝間は底の泥の中に潜んでゐて、夜になるとノコ〳〵出て來て同類の魚を喰ひ荒したり、甚しきは友喰ひまでするといふギャングなのです。

魚學的には硬骨類糸顎目中のなまず科なまづ屬となつてゐて、五六月頃産卵の爲小川の深みなどから水通しのよい細流や水田などに乘つ込んで行くので、その頃が釣の方でも最盛期に當るのです。秋に入つて水が冷え込むと再び深みへ落ち、冬になると泥の中に潛つて冬眠狀態に入るのです。

一般に行はれてゐる釣技としては、ぶつこみの脈釣と、一風變つたボカン釣とが擧げられます。

脈釣

前に記したやうに鯰は夜行性の魚ですから、平水時には夜釣を原則としてますが、晝釣もできないといふわけではなく、雨後の出水時の水の濁つた時とか、しよぼ〳〵と五月雨の降り續く陰鬱な日とか、曇り日の大干ぞりなどには思はぬ大釣をする事もあるのです。然し普通には夕まづめから夜にかけて狙ふべき魚といへませう。

竿――鯰釣には竿の調子などはどうでも、先づ丈夫な竿を選ぶべきです。二間半くらゐの延竿がよいでせう。

道糸――人造テグスでも澁糸でも、やはり丈夫一式なものを竿いつぱいの長さにつけます。

鈎素――やはり人造テグスで十分、長さは六七寸くらゐ。

錘――四五匁の玉錘を道糸と鈎素との結び目からぶら下げます。

鈎――形は何でも頑丈な肉太の鈎を使ひませう。

夜釣には竿先に小鈴を結んで、竿を二本くらゐ並べて當りを待つのです。

餌――ドバミミズか泥鰌の一尾がけ、或は縞ミミズを三四匹房にかけます。汐入川を釣る時にはゴカイをやはり三四匹かけると效果があります。

釣法――狙ひ場所は用水の水門口とか、橋下の杭まわり、水通しのよい沈礁の附近、岸から

雜木や叢などの覆ひかぶさつてゐるやうな淀みを選び、そつと足音を忍ばせて近寄り、仕掛を投げ込むのです。夜釣には懷中電燈が必要ですが、その光を水に落す事は禁物で、月夜の晩も避けた方がよいくらゐ、光をとても嫌ふ曲者です。當りが最初ゴツンと竿先に來てもまだ合はせず續いてブル〳〵〳〵と強い引き込みが來てから、はじめて竿を大きく煽つて合はせるのです。合はせが利くと猛烈な力で抵抗しますが、それを頑丈な竿と仕掛に物をいはせて、一氣に引き寄せ引き抜いてしまふです。

ポカン釣

これは野趣に富んだ面白い釣技です。その上なか〳〵豪快味があるので、一度やつてみると不思議に後を曳かれる釣なのです。

竿――二間半から三間くらゐの延竿、やはり調子より丈夫といふ事が條件です。

道糸――澁糸か秋田糸の丈夫なものを長さ四五尺つけます。

鈎素――麻を撚り合はせて道糸よりも太めにし、長さは二三寸でよろしい。

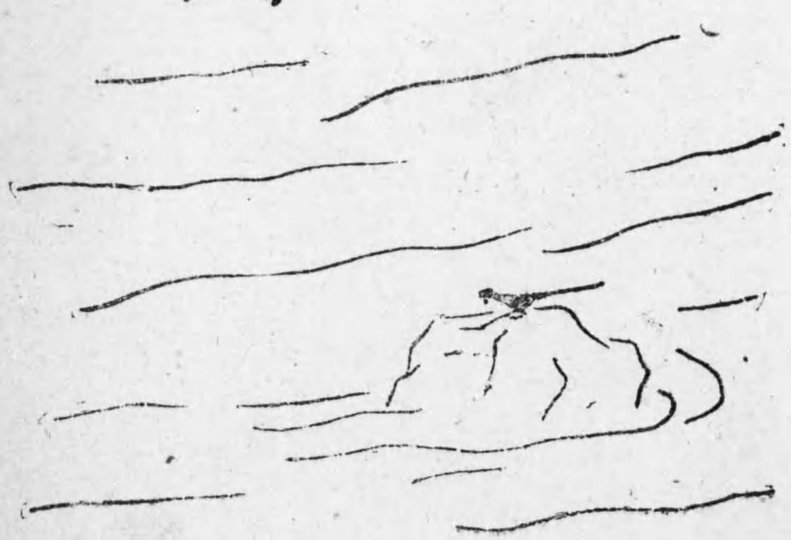
鈎――大型の鯰鈎。

餌――普通は殿樣蛙を活け刺しにするのですが、先づ蛙の肛門から鈎を刺し込み、腹の方を鈎の外側にして鈎先を蛙の上顎まで刺し通すのです。そして二本の後脚を伸ばして鈎素にくゝ

り附け、蛙が跳躍して全身をいつぱいに延ばしたやうな姿にするのです。蛙の捕れない時の用意にドバミミズを持つて行きますが、これは普通に刺し通して鈎先から一寸ばかり垂らして置けばよろしい。

釣法――これは晝間の釣技ですが、やはり晴天より曇つた日の方がよく、入梅時などは絶好です。やはり人影を見せないやうに靜かに歩み寄り、物蔭からそつと竿先を出すやうにして、水面の浮藻の附近や、蓮葉の浮いてゐる附近などに蛙をポンと落すのです。そして一寸小休みさせてから竿先をヒョイと上げ、蛙が跳び上つたやうに見せて又他の芥のかゝつてゐるやうな邊に落します。此の操作をくり返してゐると、やがてガバガバッと水音を立てて鯰が躍りかゝります。然し、最初は餌に喰ひつくのではなく、多くは尾鰭の一撃を喰らはすのですから、急いで合はせない方がよろしい。むしろこつちから五六寸送り込むやうにしてやると、續いてガバッと今度は完全に喰ひついて來ます。それに大きく合はせ、そのまゝ一氣に抜き上げてしまふのです。何しろ暴虐なギャング相手の事ですから、なさけ容赦はありません。

秋の釣



鯊（ハゼ）釣

鯊について

鯊は初夏の鱚と共に、海の釣物として最も親しみ深い魚です。それは川の鮒とよい對照をなしてゐるといへます。川の釣が鮒にはじまるとすれば、海の釣は鯊にはじまる人がもつとも多いのではないでせうか。私などもその一人でした。鯊は初夏の鱚以上に誰でも釣り易い魚なのです。それは鱚が敏捷な魚であるのに對して、鯊はどつちかといふと遲鈍な底着魚で、自分から何の動機もなしに泳ぎ廻るといふ事がほとんどなく、吸盤になつた腹鰭で底にへばり着き、餌の來るのを待つてゐるといふ精者です。しかもその貪食な事は人後ならぬ魚後に落ちず、頭の半分以上を占める大きな口で、好餌とみれば前後の見境ひもなく飛びかゝつて來るのです。ですから鯊は少し合はせおくれると、大概腹の底まで餌をのみ込んでゐるので、外すのに骨が折れるくらゐです。

私達が天ぷらにしたり、甘露煮にしたりして賞美するハゼは、魚學的にはマハゼであつて、硬骨類の沙魚目に屬し、はぜ科の魚にはまはぜ屬の外にも數種あります。俗にダボハゼといふ

ドンコ、ムツゴロウ、トビハゼ、ウキゴリ、その他十指を屈するほどあるのですが、釣の對照とされて人氣のあるのはマハゼの事です。分布區域も非常に廣く、北は北海道の南部から九州に至るまで、ほとんど全土に渡つて饒産する魚で、産卵は早春三月頃沿岸の深場に行はれ、孵化した稚魚は初夏の頃淡水の混り合ふ淺場に上り、六七月頃には潮入りの川や池沼にまで入り込んで盛んに餌を漁り廻ります。秋に入つて水が冷え込んで來ると再び深場を慕つて戻りはじめ、冬期は相當な深みまで潛んでしまふのです。釣場もその季節々々に從つて移るわけですが、夏季のまだ二三寸にしかならない稚魚は釣つても仕方がないので、ハゼは秋の魚といふ事になつてゐるのです。

ハゼの釣技もその季節々々によつて多少變りますが、最も一般的に流行してゐるのは、船のコヅキ釣でせう。同じコヅキ釣でも初秋の淺場の釣と、晩秋の落ハゼの釣とは多少異つてゐますし、潮入りの釣技もあり、又長竿の岡釣もなか〳〵味のあるものです。その他、地方的な釣技として、全然鈎を用ひず餌に喰ひついて來る魚を釣り込む珠數子釣などもありますが、こゝでは最も一般的な船のコヅキ釣と、長竿の岡釣とを記す事とします。

船のコヅキ釣

ハゼの小氣味のよい魚信と、數の澤山釣れるところとが江戸つ子の趣向にかなつたのか、ハ

ゼ釣は、江戸時代から東京附近の一名物となつて、かなり盛に行はれてゐたらしく、文獻類にも隨分その片影が殘されてゐます。又今日各地に傳はつてゐる釣技のうちでも、東京附近の乘合船を基本とした釣技は、最も進歩したものといへませう。コヅキ釣はかなり各地で行はれてゐますが、その基調となるところは同じですから、東京附近の釣技をこゝに紹介します。

竿――乘合船では一般に五六尺の中通し糸卷附の手竿一本と、二間乃至二間半にも及ぶやはり中通しの長竿一本と、二本の竿を兩手に持つて釣つてゐます。調子は何れも相當強いもので短い竿では舷側附近を、長竿では遠くを探るのです。然し、これは多人數乘り込みの場合を考慮しての工夫ですから、五六人迄の乘合ひなら何も二間に及ぶ長竿をふるふ必要はなく、三四尺の手竿の方が手廻しはよいと思ひます。さうなると中通しの必要もないわけで、外通し竿では糸が先端の金具にからんだ時外しにくい爲中通しにするのですから、短い手竿なら外通しの方が便利だと思ひます。

道糸――人造テグスの一厘半か二厘柄、或は同じくらゐの澁糸を一把(二十五尋)糸卷に卷き込み、その先端に同じくらゐの本テグスを一二本つなぎ、先端を松葉の輪に結んで置きます。

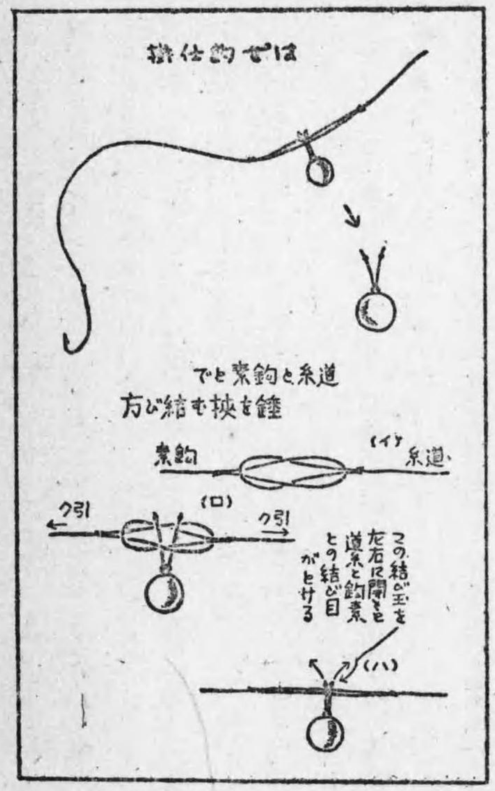
鈎素――一厘半か一厘の本テグス四五寸、そして元をやはり松葉の輪に結びます。これは道糸の端の輪とくゞり合はせて結ぶ爲で、その結び目に錘のチの紐を挾んでしめるのです。

鈎――普通は六七厘の袖型、晩秋になつて魚が大きくなると一分くらゐまで使ひます。

錘――太鼓型をしたハゼ錘でも、丸型でもよろしい。重さは潮流と深さによつて三匁乃至五匁を選び分けます。此の錘の環に一寸ばかりのチを結び、圖の如くその兩端に結び玉をつくつて置きます。此のチを道糸と鈎素との結び目に挾むのです。

此の結び方をする代りに道糸の先端を三德結びにしても、三德金具や小形の片天を使つてもよろしい。然し當りの微妙な時には、此の締めつけ方がよいでせう。

餌――ゴカイの一點張りで、六七分の長さに切つたものを二三分鈎先に刺し、後をぶら下げて置きます。喰ひの悪い時には一匹ざしの方がよろしい。



釣法――先づ糸の長さを、錘がちやうど底に屆く程度にきめてから、長竿を右手に、手竿を左手に持ち、兩手を三四寸づゝ交互に上下しながら、錘が底をコツ〳〵と叩くやうにこづくの

です。その間、船頭は船の舳を潮流に向け、逆らふやうな位置にして練るので、此の練り方がなか〳〵難かしく、割合に輕い錘が潮に斜めに流されぬやう、常に垂直近い角度でゐるやうに漕ぐ事が技術とされてゐます。

さうしてこづいてゐると、ククッといふ當りが竿先から傳はりますが、早期のハゼや喰ひ込みのよい日には、それに突嗟に合はせてしまつた方がよく、晩秋以後や喰ひ込みの悪い時には一瞬送り氣味にしてから合はせるか、ちよつと竿の動きを止めて次の締め込みに合はせるか、輕く聽いてみるやうにしてそこにググッと來たところを合はせるかした方がいゝやうです。そのコッは少しハゼ釣の經驗を積んでから會得するより他はないでせう。

どつちかの竿の合はせが利いたら、片手でもう一本の竿を直ちに舷の竿掛にかけ、片手を高く差上げながら糸をゆるませぬやうに締めて、竿を置いた方の手で道糸をとり、次に合はせた方の竿を置いて兩手で手繰り上げるのです。此の手順は誰にもすぐに會得できます。さうして魚をとり込んだら直ちに餌を刺しかへ、仕掛を投げ込んで兩手に竿を持つ。小物は數を釣る事が一つの樂しみですし、誇りでもあるのですから、此の手順を早く呑込むやう、練習する事です。

東京附近の乘合船には色々と習慣があつて、早朝船出をして釣場に着く迄の間に、船の中で抽籤を行つて坐席の位置をきめるのです。一番が將監(しようげん)といつて船の先端、二番が

その次といつた具合です。將監の人は大概の場合常に他の人より先に新場(あらば)を探るわけになるので、長竿を使はないのが仁義になつてゐましたが、さういふ仁義は次第にすたれつゝあるやうです。何しろ近頃は大して廣くもない船に、二十何人もの客を目白押しに詰めるのですから、なか〳〵仁義などにかゝりあつてはゐられなくなつたのでせう。

釣れる潮時は上げにしろ下げにしろ潮の動きはじめから暫くが絶好で、その間に釣果を上げなければいけません。上げ潮には面白いやうに釣れたが、下げに向いてからぱたりと止る事もありますから、喰の立つてゐる時にまごついてゐたのでは戰ひは負けです。

長竿の岡釣

長竿の岡釣にも、探り釣と並べ釣とがありますが、仕掛は双方ともほとんど同じでよく、晩秋から初冬の落ハゼになると、此の同じ仕掛を用ひて、船から深場の狙ひ釣をするのも面白いものです。又流れの緩やかな入江などでは、浮木を用ひて並べ釣をするのも別な趣きがあるものです。

ハゼの長竿釣は原則としては探り釣をしたいのですが、場所によつては、釣手がズラリと釣場を埋めて並ぶ事などがあり、さうなると探り歩く隙がないので、止むを得ず並べ釣をしなければなりません。また探り釣ですばらしい底を探り當て、そこに落着いて並べ釣に替るのもよ

いものです。で、双方をつき混ぜて用ひるのがよいと思ひます。

竿――胴のしつかりした先調子竿で、長さは二間から三間くらゐの輕いもの、一本竿で探る時にはなるべく長い竿の方が廣く探れてよいでせう。

道糸――二厘柄の人造テグスの先に本テグスを一本つなぎ、全長は竿より長めにします。

釣素――一厘半の本テグス六七寸。

錘――玉錘か茄型の二匁くらゐ、チをつけます。

釣――袖型の七八厘。

餌――ゴカイの一尾がけ。

道糸と釣素との結び合はせは前と同じでよく、結び目に錘のチを挾みます。最初は此の仕掛で探り釣をするわけですが、流れがあれば潮上の方に向つて竿いつぱいに振り込み、少しづつ段をつけるやうに手前へ錘を引き寄せながら、潮下の方へ流して行くのです。段をつけるのは、その邊にハゼが待機してゐるとすれば、鮒と違つて底着魚である爲、流れて行く餌を流れに乘つて追ふやうな動作をとりませんから、餌をみつけて駈け寄る時間を待つてやる爲なのです。コツンと當りを感じたらそのまゝ錘を落着かせて次の當りを待ちます。すると今度は前よりも強く引き込むやうに、ブル〳〵ッといつた當りが來ますから、それにグイと合はせて引寄せるのです。當りがなければ、同じ場所を二三回探つてみては少しづゝ移つて行くのです。

ハゼは必ず底に變化のある場所に集つてゐます。どんとえぐれてゐるやうな所でもあれば、それを中心に必ずゐるものと心得て、もう一本なり二本なりの竿を取り出し、並べ釣に替へるのもよいでせう。並べに替へる時には、流れの緩い所であつたら二匁の錘でもよろしいが、三匁くらゐに取り替へた方がよいでせう。何度も通つて狙ひ場のきまつてゐる場所に並べ釣をするのには、穂先に小鈴を結んで置くと便利です。ハゼの當りは相當強いので、鈴の音が魚信を傳へてくれます。並べるのには竿を末廣がりに打ち込み、道糸をピンと張らせて置かなければいけません。そして當りがなければ時々竿を上げてみて餌を調べ、餌に變りがなければ少し方向を變へて打ち直してみます。餌がなくなつてゐるかちぎれてゐれば、そこに魚がゐる證據ですから、すぐに餌をつけ替へて同じ所に振り込みます。ハゼは釣り落しても、すぐ又來るものですから、餌に變化があればもうしめたもので、そこへ次の餌が落ちれば必ず又喰ひついて來ます。

浮木で釣る時には、錘を一匁くらゐに替へて、浮木は大きめの德利浮木がよく、十分引き込ませてから合はせるのでよろしい。うつかりしてゐると、何時の間にか打ち込んだ場所と違つた所に浮木が移つてゐたりする事があります。それは餌をくわへて自分の元ゐた所へ戻つた證據で、大概は腹の底まで鈎をのんで上つて來るものです。

晩秋の船釣は、水がしだいに冷え込んで、ハゼが深場に落ちて行く前、海苔粗朶や藻の間に

からんでしばらく落着くものですから、それを狙つて釣るのであつて、冬籠りに入る前とて餌料の多いさういふ場所を足溜りにするのですから、喰ひ氣も、相當に立つてゐるわけで、なかなか面白い事があります。船をさういふ障害物の根廻りにちやうど鈎が屆くやうにしつかりと止め、三本くらゐ舷から竿を並べて當りを待つのです。錘は二三匁でよいが、鈎素は四五寸につめないと、とかく障害物にからみ易くていけません。乘合船といふわけには行きませんが、場所さへ判つてゐれば自分で漕いで行つて止めればよいので、練り釣ではありませんから船頭の厄介になるにも及ばないのです。

これも又のんびりとしたよい氣分です。晴れ渡つた秋空の下、終日船の上で竿先を見てくらすのも樂しいではありませんか。

ハゼ釣の心得

ハゼは天ぷらによく、鹽燒によく、燒きがらしにして置けば保存も利いて、正月の雜煮のだしには絶好、お節料理の甘露煮、昆布卷等、その使途が多いので非常に喜ばれます。そこで誰しも、一尾でもよけいに釣り上げて土産にしようと慾が出るものです。ところが、ハゼ釣の季節にはしば〳〵突風が起つたりして、いはゆる秋の空の異變が起る事があるのです。岡釣ならすぐに竿を納めて歸路に就けますが、沖に出てゐるとさうは行きません。乘合船などで船頭が

附いてゐれば、早めに空の雲行などを見て歸り仕度を促してくれますが、自分船頭の場合にはつひ夢中になつてしまつて空まで注意が屆かないものですし、少しくらゐ變だと思つても、素人はとかく自分に都合のよい方に解釋してしまふものですから、いよ〳〵怪しくなつてもう手遲れになつた時分に慌て出したりするものです。多少とも怪しいなと思はれる時には、萬全を期して歸り仕度にかゝらなければいけません。又、船頭がもう歸らうといひ出した時には、必ず船頭の命令に從ふべきです。中には狡い船頭もあつて、そんな事をいゝしほに早歸りをすゝめる者もなくはありませんが、多くは船宿に歸り着くか着かないうちに突風が捲き起つたりするものです。私もしば〳〵さういふ事があつて、船頭の慧眼に感服した經驗を持つてゐますから、たとへ狡るをきめ込んでゐるのだなと思つても、素直に服從して置いた方が無事でせう。もし狡い船頭だと思つたら、次回にはもうその船に乘らなければいゝではありませんか。

それから度々いふ事ですが、稚魚を獲る事をしないで下さい。秋に入れば五寸にも六寸にも成長するハゼを、まだ夏のうちにやつと三寸にも足りない魚を釣る人が、近頃非常に多くなりました。私は殘念でならないのです。その頃のハゼは馬鹿ではないかと思はれるくらゐ、いくらでも釣れるのです。三百や三百五十はわけはありません。さう釣れたのでは釣の味などなくなつてしまひます。いくら數を釣るのがハゼ釣の一目的であるとはいへ、その數も、一尾々々に釣味を感じて釣りたいと思ひます。二寸や三寸のハゼを釣るよりは、五寸六寸と成長したハ

ゼを釣る方がどれ程面白い事かしれないのです。魚を可愛いがつて育ててやつて、やがてその魚に樂しませて貰ふやうに心がけたいと思ひます。食糧資源を確保するといふ上からも、稚魚の濫獲は釣人の最も戒しむべき事だと信じます。

鱸（スズキ）釣

鱸について

鱸は秋の魚といふよりは、むしろ夏の魚といふべきでせう。鱸といへば誰しも先づ、夏の晩酌膳に供せられる「あらひ」の味を聯想せずにはゐられません。鱸の釣期も、初夏六月頃からはじまつて、十二月の落鱸まで續くのですが、私がこゝにとり上げるのは、成魚となつた大鱸の釣ではなく、子鱸のセイゴ、フッコ級の魚を主としますので、釣れ盛りの秋の部に納めたわけなのです。

近年私たち素人釣士の間でも、大鱸を狙つて出漁することが盛になりましたが、多くの場合職漁者の御厄介にならなければならないので、なるべく遠慮した方がいゝのではないかと思ひます。とはいふものの、あらゆる釣物の中で、鱸釣くらゐ豪快なスリルを感じさせてくれるものはありませんので、一度その味を知つた者は、つひ〳〵又後をひかれてしまふのでせう。私などもその口で、鱸釣と聞くと矢も楯もたまらなくなつて來るのです。

然し、若魚のセイゴの頃にも、柄に似合はず小生意氣な暴れ方をみせますし、フッコともなればもう立派に鰓洗（えらあら）ひなども演じて、鱸釣の快味を滿喫させてくれるのです。鰓洗ひといふのは、鱸獨特の妙技であつて、鈎にかゝると他の魚は遠く逃走しようとして、釣糸をグイ〳〵引く一方ですが、鱸は逆に手元の方に馳け上り、水面上に躍り上つたりして鈎を外さうとするのです。鱸の鰓蓋の先は剃刀の刄のやうに鋭利なので、どうかするとそれで鈎素を切られたりすることもあります。

鱸は棘鰭類のハタ科に屬する魚で、北日本にはあまりゐませんが、中部以南の沿海に相當豊富に棲息し、初夏の頃からは餌の小魚を追つて淡水域の河川にまで溯上し、なか〳〵活潑に發展する暴れ者です。十一二月頃近海の深みで産卵し、孵化した稚魚が翌春四月頃には一寸くらゐになつて、河口に入つて來ます。そして暫く淡水中で發育するのですが、その頃の幼魚時代を東京ではコッパといつてゐます。秋に入るとそれが五六寸から七八寸に育ちますが、それをセイゴといひ、二三年魚の尺から尺七八寸級の若魚がフッコで、四年魚の二尺以上にならないとスズキとはいひません。又この大鱸が腹に卵をいつぱい持つて、十一二月頃深みに落ちて行きますが、その頃の鱸をハタブトとか落鱸とかいつて、一時釣人の血を湧き立たせるので

す。

所によつてはフツコ級の魚をマタカと呼ぶ地方がかなりあります。中京から瀬戸内一帶の方面は主としてさう呼んでゐます。又成魚の大物をオホマタ、オホモノなどといふ所もあり、東京ではこれをオホタロウなどと呼ぶ人もあります。

さて、鱸は數も相當多い上、魚品も高級に屬し、しかもその釣味がすばらしいときてゐるので、釣技も色々と各地で研究されてゐますが、こゝには誰にもすぐにとりつき易いセイゴ、フツコ級の魚狙ひの釣技を紹介するに止めます。

セイゴの竿釣

戰爭前には全然見られなかつた風景ですが、近頃東京のまん中の數寄屋橋附近の橋上や河岸から、二間ばかりの竿をつき出してゐるのが、初秋の頃から見受けられるやうになりました。以前は傍を通るだけでもプンと異臭をつくどぶ川だつたのが、いつの間にやら上潮時などには美しい水色の川になつてゐるのです。工場や汽船などが油を大切にしはじめた爲に、東京港内の底がきれいになつたせいなのです。で、以前は魚など棲める川ではなかつたのに、隅田川はおろか丸の内まで、初秋のセイゴが上潮にのつて上つて來るやうになつたわけです。

といつて、まさか外濠のセイゴ釣を釣書にとり入れるわけにも行きませんが、何れにせよ

初秋のセイゴ釣場は、戰前から見るとずつと多くなつたことはたしかです。この現象は東京ばかりではありますまい。大阪でも神戸でも、或は名古屋附近でもさうだらうと思ひます。で、此のセイゴの竿釣は、さういふ川の釣に適した釣技ですが、海の岸壁などにも應用されませう。

竿——先調子の二間乃至三間くらゐの竿、前記ハゼの岡釣の竿と同じものでよろしい。

道糸——二厘柄の人造テグスを竿より長めにつけ、先端に錘を結びます。

鈎素——一厘半の本テグス八寸を、錘上六七寸の邊に一本、その上六七寸の邊に一本、都合二本の枝鈎にします。

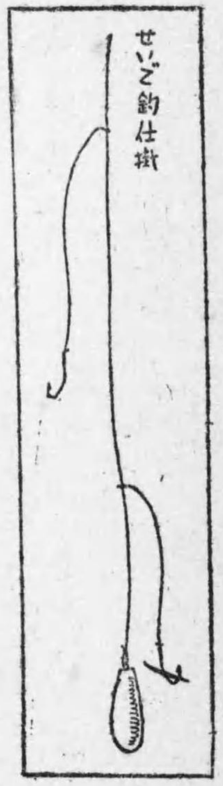
鈎——袖型の七八厘。

錘——玉型か茄子型の三匁くらゐ。潮時の流れの強い時には五匁くらゐにつけかへます。

餌——ゴカイの一尾がけ。

大體前記のハゼの岡釣と大差はありませんが、鈎素を錘上に枝鈎式につける點が特長で、ハゼは底着魚ですが、セイゴは水の中層を游ぐ魚なので、鈎の位置も上位の方がよいわけです。ハゼ釣の鈎にもよくセイゴがかかるものですが、ハゼ釣に行つて今日はセイゴが多いなど思つたら、錘上に此の枝鈎を結び、兩天かけるのもよいことです。

魚信は最初ツン〳〵と勢ひよく來ますが、それに合はせたのでは早すぎて、次にグイと竿先を



やうな暴れ方をしますから、糸をゆるめず一氣に引寄せた方がよろしい。

場所が廣ければ三四本竿を並べて、並べ釣がよく、ハゼのやうに探り釣をする必要はありません。小舟でも手に入れて、川中に艫を潮下に向けてカシつけ、艫から並べ竿をして魚信を待つのも一層よろしい。此の場合はフッコ級の魚がしば〳〵混るものですから、道糸は三四厘、鈎素も二厘くらゐに強める必要があります。又、鱸の相當に溯る川だつたら、一層太いものを使はなければなりません。同時に手網の用意も必要になつて來るのです。

フッコ級以上の魚に就いては、次の川鱸の流し釣を熟讀して下さい。

絞り込むのを待つて合はせれば、ちやんと鈎先が上顎にくひ込んでゐるのです。

セイゴでも少し型が大きくなると、生意氣に鰓洗ひの

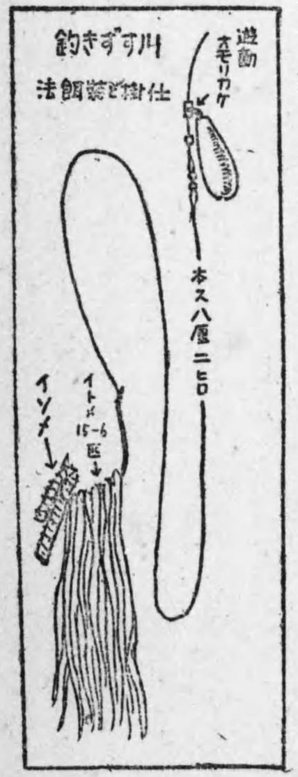
川鱸の流し釣

私は此の釣を毎年續けて水戸郊外の那珂川や、涸沼川でやつたものですが、或る時などは半日で三百匁から八百匁に及ぶ鱸を、三十二尾も釣り上げたことがありました。そんな事は一生

に一度あるかないかの僥倖にすぎませんが、場所と潮時とに惠まれれば、思はぬ釣果にびつくりする場合が往々あるものです。季節は七月頃から十月初旬頃までがよく、小潮廻りの日は潮の動きが少いので望み薄です。まあセイゴ混りで百匁級のフッコを狙ふつもりで出かければ大概失望することはあるまいと思ひます。

竿——一丈くらゐの先調子の丈夫なもの、延竿で充分です。穂先に小鈴をつけます。これを二本用意し、他にブッコミ仕掛をかける脈鈴を二本用意しませう。それから竿尻には、大物が來た時の用意として、二枚糸くらゐのしつかりした紐を十尋くらゐ結びつけて置いて下さい。此の紐を尻手（しつて）といひます。

道糸——竿に結ぶ道糸は人造なら八厘柄くらゐの太いもの十尋、その先端により戻しを結びます。脈鈴の分は同じくらゐの人造なり澁糸なりを二十五尋、丸輪の糸卷に卷き込んで置き、先端にはやはりより戻しをつけます。



錘——角型でも茄子型でも七八匁から二十匁くらゐまでのものを五六種用意して、流速によつてつけかへ

ます。道糸に遊動式の錘掛けを引き通し、それにかけるのです。大物がかゝつた時の用意に、すぐに外せるやうにして置く必要があります。

鈎素――七八厘柄の本テグス二尋を、道糸の先のより戻しに結びます。

鈎――丸角型のフツコ鈎五分くらゐ。

餌――イトメを一升くらゐ用意して行きたいと思ひます。その他にイソメが少しあれば一層よろしい。

此の釣は船を流れと直角に、つまり横に止めて、舷側から釣糸を流して釣るのですから、強いて船頭の厄介になる必要はありませんが、最初は場所を教はる意味で頼んだ方がよいでせう。船がしつかりカシついたら装餌にかゝります。先づイトメを十五六本ばかり、一匹づゝ頭の硬い所に鈎先を刺して刺し通し、房にかけるのです。最後にイソメを一寸くらゐに切つて、餌止めとして鈎先に刺し止めます。これを水に落してから、錘をつまんでなるべく遠く下流に投げ込みます。すると流速がぐん〳〵錘を潮下に持ち込みますが、やがて底に落着いたところで竿を舷側に止めるのです。一本の竿はなるべく舳の方に、もう一本はなるべく艫の方に離して備へて下さい。これは魚がかゝつてから暴れるので、糸の間隔をへだてて絡れを防ぐ爲なのです。脈鈴の分も同じやうに仕掛を流し、十四五尋流し込んでから脈鈴の糸止めにかけて當りを待つのです。

小鈴がチリ〳〵〳〵と鳴つて魚信を知らせますが、勢ひよく鈴を鳴らすのは大概セイゴ級の小物で、大物になるほど當りが柔かなのです。八百匁、一貫目などといふ優物になると、大概ははてなと首をかしげる程で、時には全然鈴を鳴らさず、穂先をふるわせる程度のこともありますから、常に目を放さず注意してゐなければなりません。さて、いよ〳〵魚信が來たら落着いて竿尻を持つなり、脈鈴から糸を外すなりして次の當りを待ちます。と、今度はグーッと持ち込むやうな引きを感じますから、それに應じて一尋ばかり送り込んで置いて、一寸聽いてみるのです。その時グンと重みを感じたなら、直ちに大きく、鈎合はせをくれなければいけません。

百匁や二百匁のフツコ級なら一氣に道糸を手繰り寄せても大丈夫ですが、三百匁以上の魚になるとなか〳〵一筋縄ではいきません。先づかゝつた魚が十尋も先の水上にガバ〳〵と躍り上つて、例の鰓洗ひを演じ、しきりに抵抗を試みますから、こいつ大きいぞと思つたら、無理をせぬやうに落着いて引き寄せます。魚の暴れる時には暫く待ち、抵抗のゆるむすきを見て手繰り込み、糸がゆるんだとみたら一氣にグン〳〵手繰つて、駈け込みにそなへなければいけません。最後に舷側まで引寄せても、手網に納めてしまふまでは油斷ができません。

手網は必ず魚の頭の方から入れること、魚に見えぬやうになどと思つて尾の方から入れたりすると、魚はびつくりして逃走しますから、必ず失敗するものです。魚には後退力が缺けてゐ

るので、頭から手網を入れても後ろには逃げられないものなのです。

此の數分間の奮闘は何ともいひやうがありません。それこそ全くの三昧境です。

鰡（ボラ）釣

鰡について

鰡も又大衆魚として一般に馴染の深い魚です。それもその筈で、戰前我國の年産額が二百五十萬圓から三百萬圓に及んでゐたさうですから、水産物としてかなり重要な地位を占めてゐるわけです。從つて鰡は職漁者の間でも重要な釣物となつてゐて、各地にそれ〴〵職漁的釣技の發達をみてゐるのです。

私達釣人の間にも、各地各様の釣技が發達してゐますが、鰡釣は職業釣と素人釣との間に、かなりはつきりと限界が保たれてゐる傾向の見えるのは、まことに喜ばしい事と思はれるのです。職漁者は釣趣などどうでも數を多く釣る事が目的であり、私達は數よりも釣趣を樂しむところに目標を置くべきで、鰡の釣技にはそのけじめが何處でもはつきりと見えてゐるやうに思ひます。

鰡といふ魚はまことに氣紛れ者で、機嫌の悪い時にはいくら澤山姿が見えてゐても、さつぱ

り餌を追つてくれません。鼻先に好餌がぶら下つてゐても見向きもしないのです。ではそれ程お行儀のよい魚であるかといふと決してさうではなく、いざ食ひ氣が立つたとなると、全く始末に困る程釣れてしまふくらゐ貪食な魚なのです。實に氣の知れない魚といへませう。私達にはその氣の知れないところに一つの魅力があるのですが、職漁者はそれでは立つて行きません。で、釣期でさへあれば何時出かけて行つても必ず釣れるといふ工夫がなされるのです。その方法を飼着け（かひつけ）といつて、鰡の食慾をそゝる寄餌を十分に沈めて置き、そこには常に食ひ氣の立つた鰡が寄り集つてゐるやうにするのです。それには勿論相當な資本を要します。内灣などにはよくさういふ飼着け場所があるものですが、いくら釣れるからといつて私達がその釣場を犯す事はつゝしむべきですし、その眞似をして飼着け釣をするのも愚かな話といふべきでせう。

さて、此の鰡といふ魚は世界中ほとんどどこにでもゐるらしく、太平洋は勿論、大西洋にも印度洋にも、地中海にも、熱帶にも溫帶にもゐるのださうです。我國では北海道の北部をのぞいて、殆ど全土に渡つて棲息し、鹹水域は勿論の事、淡水ばかりの川沼にまで棲息してゐるのです。魚學的分類は硬骨類中の鰡亞目、ぼら科のぼら屬となつてゐますが、それ程廣く分布し、重要水産物となつてゐながら、魚學的な研究が完成の域に達してゐないといふのはどうした事でせうか。ぼら科の中には私達のいふボラの他に、からすみぼら、せすぢぼら、めなだなどの

種類があるといはれてゐますが、ボラとからすみぼらとは同種だといふ學者もあり、又その移動經路に色々と異說があつたりして、決定的な研究がなされてゐないらしいのです。

ボラは俗に出世魚と稱して、どこでも稚魚から成魚に達する迄の間に、その體型によつて色色と名前が變つてゐます。東京附近では孵化して間もない一寸ばかりの稚魚をキラ、二寸くらゐに成長して二三月頃淡水に入つて來るとオボコといひ、六月頃になつて三寸を超えるとスバシリになり、夏に入つて五寸くらゐに達したものからイナといつてゐます。年を越して二歲魚にならなければボラとはいはないのです。最も老大したものをトドと稱し、俗にトドのつまりといふ言葉がありますが、その語源はそこから來てゐるのだといはれてゐます。又一說によるとトドはメナダの大物の事だともいはれ、その邊の事情ははつきりしてゐないのです。各地とも成魚となつてからの名稱は大概ボラですが、幼魚時代には土地々々で色々な俗稱があります けれど、それはこゝでは省略する事にしませう。

鰡の釣技にも各地の鄕土色がよく現れてゐて面白いものがあるのですが、それをあれこれと拾ひ集めてゐては大變ですから、特色のある代表的なものを二三紹介する事としませう。

江戸前のボラ釣

十月頃からそろ〳〵はじまる東京近海、殊に品川、羽田沖の海苔粗朶を中心に行はれるボラ

釣の人氣は大變なものです。隅田川筋から品川、大森、羽田、それに深川の各地から、千葉縣寄りにかけて散在する船宿の船が、ほとんど全部それに集注されるといつてよいくらゐで、俗にボラ舟千艘などといはれ、千艘はおろか快晴の日曜日などには何千艘が、粗朶廻りに殺倒するのです。その盛況はまことに見事といふより他はありません。

然し、此の釣は船一艘に客二人迄と限られ、理想的には船頭と二人だけで釣るのがよいといはれるので、かなり贅澤な部類にはいる釣です。釣場の先取權を獲得しようと、先をあせるので、何れも機械船で飛ばせてゐましたが、最近では燃料油の不足からそんな事は出來なくなつて、手漕か帆ででかけるやうになつた樣子です。それならすこし腕に覺えがあり、釣場を心得てさへゐれば、何も船頭の厄介になる必要はないのです。何故ならハゼのやうに練らせる必要はなく、粗朶廻りに船を止めて釣るのですから、自分船頭で十分に間に合ふわけです。江戸前に限らず他にも此の釣技の應用の利く所はあると思ひますから、ぜひ試みて下さい。

釣方には、餌を使ふ喰はせ釣と、呼び餌に寄つた魚を、錨で掛釣にする錨釣とがありますが、双方を簡單に記してみませう。

喰はせ釣 此の方は概して初期に向く釣技で、十月中旬頃から毎年はじまります。

竿——昔から丈一か二間ときまつてゐて、二本一對になり、胴のしつかりした丈夫な輕い竿が必要です。穗先は錨釣よりやゝ軟かめのものを使ひます。一日操作してゐるので、疲れを助

ける爲に肘當の附いたものが定式です。

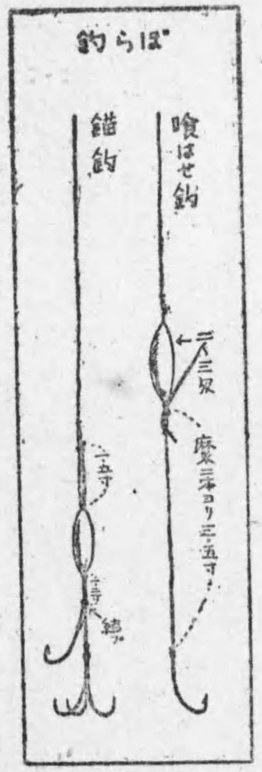
道糸――丈夫な太物の澁糸に先へ本テグスの一分柄くらゐの太物をつなぎ、長さは釣場の水深によりますが、概して竿より短くします。

錘――棗型引通しの二匁か三匁に鈎素の麻糸を引通し、上下に結び玉をつくつて止めます。

鈎素――水につかつて柔軟、しかも丈夫といふところから麻糸の二本撚りを使ひます。ボラは頗る眼が惡く、あまり悧巧な魚でもないので、テグスにする必要はないのです。長さは錘下から鈎まで三寸五分が定式。

鈎――袖型のボラ鈎、三分か四分。

餌――縞みゝず(キジ)とゴカイとを並用しますが、バチが出だしたらそれに限ります。バチはイトメが晩秋に脱皮して、沼底から浮游しだしたものの事で、黄色や青の膿汁のやうな粘液に滿たされ、見るからに魚の好きさうな感じです。裝餌法はキジを二つ折りにして二匹並べて胴刺しにし、鈎先にゴカイを一匹チョンガケにして、キジと長さを揃へます。バチが出たらゴカイの代りに使ふのです。



釣法――船の艫を狙ふ方面に向けてしつかり止め、艫の右舷から左舷へ船板を一枚横に渡して、それに腰をかけたり坐り込んだりして釣るのです。仕度が整ふと二本の竿を兩手に支へ、仕掛を靜かに水に入れて、錘が底に屆いたらすぐ七八寸ばかり上げ、餌が底から三四寸離れるやうにします。そして左右の手を交互に二寸くらゐ上下するのですが、その速度はあまり速すぎぬやう、餌が自然に浮游してゐるやうに見せかけるのがコツといへませう。此の操作を間斷なく續けてゐると、やがて微妙な魚信が傳はつて來ます。ムヅ〳〵するやうな當りといひませうか、フワ〳〵するといひませうか、とにかく變だなと思つたら、そつと竿先を三四寸上げるやうにして聽いてみるのです。その時竿先に何か重味がかゝつてゐれば、大概ボラが鈎をくわへてゐる證據ですから、そこでグイと合はせて力一ぱい一氣に引き抜いてしまふのです。ボラ釣は魚の引きを樂しんでゐたりしてはいけません。何しろ粗朶廻りといふ障害物だらけの間で釣るのですから、その中に馳け込まれたらもうおしまひなのです。筋肉勞働といつて差支へないくらゐ、一氣呵成に牛蒡拔きをしてしまふ。それをボンと膝の前にはね込むのが技巧で、昔はボラ釣に手網を使ふと笑はれたものだそうですが、近頃では手網が相當見えるやうです。ボラ釣仕掛の頑丈一點張りなのは、此の操作のためなのであります。從つて大漁の後などには、二三日身體中が痛んでとんだ難儀をするものですが、然しこれはまことに嬉しい、ほゝ笑まし

い難儀といへませう。

錨釣　喰はせ釣でどうも思はしく餌をくわへない時などに用ひてよく、また晩秋に入つてボラの眼に脂がのり、かすんでしまふやうになつてからの釣技として絶好です。

竿――前と同じですが、穂先だけ硬めのものに替へた方がよろしい。

道糸――前と全く同じです。

錨仕掛――約七寸の麻糸二本撚りの一端に、ボラ釣用の三本錨を結び、他の一端に餌鈎を結びます。そして三寸に四寸の邊で二つに折り、その二つ折りになつた先を棗型二三匁の引通し錘に通して、錘上一寸五分のところに結び玉をつくり、錘の直下にも結び玉をつくつて錘をとめます。錘下の麻の鈎素が二本になつてゐますから、一寸二分の邊で二本を結び合はせると、餌鈎は二三分鈎素を殘して中途に枝になるやうになります。(圖參照)

餌――前と同じですが、餌鈎だけに刺して錨には刺しません。晩秋ボラの眼にかすみがかゝつて來ると、餌の代りに赤毛糸か赤いゴム紐をぶら下げただけでもよく、いや、その方が効果的になるのです。

釣法――船や竿の扱ひは前と變りませんが、合はせ方がまるでちがひます。錨釣はボラを釣るのではなく、ボラの方でかゝつてくれるのを待つのです。例によつて、ムヅ〳〵とか、フワフワとか魚信が來た時には、魚が餌を舐めに來てゐるのですから、それに合はせてグイと竿先

を煽ると、餌の眞下にある錨にひつかゝると思ふでせう。ところが實際は左に非ずで、決してひつかゝるどころか、逆にボラはびつくりして逃げてしまふだけなのです。で、微妙な當りを感じても、知らん顔をして同じ上下動を繰り返してゐなければいけないのです。知らん顔をしてゐても、心持だけは大いに緊張してゐなければいけません。すると間もなく、竿先にズシリと重みがかゝつて來ます。まるで底の棒杭にでもひつかゝつたやうな重みです。それがボラの方から錨にのつかつてくれた證據なのですから、もう容赦はありません。力限り根限り腕一杯に抜き上げるのです。四歳以上の大物になるとなか〳〵一通りならぬ力を要します。うつかりまごついてゐて逆に引き込まれれば、ポキリと竿を折られてしまふ事もあるのです。それこそ一瞬の油斷もなく鬪志を漲らせて待機してゐなければなりません。

各地のボラ釣技

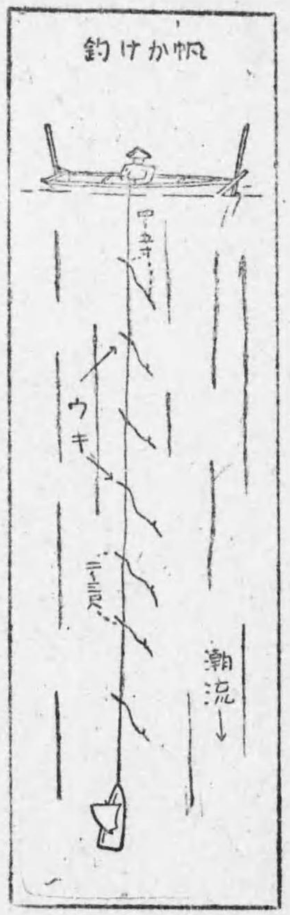
利根川口の擬餌釣　銚子附近の利根川口では、前記の錨釣に似た仕掛で、晩秋のボラを釣つてゐます。それは完全な擬餌釣で、餌鈎は全然使はず、三本錨の上の鈎素に、自轉車タイヤのゴムチューブを細く切つたものを、何本も房にして結びつけて置くのです。その上に附ける錘は相當深場を釣る關係上、十六七匁もある大きなものを使つてゐます。錘下の鈎素に一分柄くらゐの太い本テグスを用ひるのは、流速があるので水切れをよくするためではないでせう

か。

江の島の丸め釣　黒鯛釣の項で、やはり江の島の丸め釣をしるしましたが、それとほとんど同じ釣方で晩夏から初秋にかけてボラを釣るのです。しかし、ボラは黒鯛のやうに糸に敏感でない爲、あんな細物を用ひる必要はないのです。道糸は人造テグスの六七厘柄、釣素も本テグスの一分柄といつた具合です。本餌にはシラスを刺したり、イトメを六七分に切つて刺したりしてゐます。練餌の團子でそれを包むことは、黒鯛釣と變りません。釣方で多少異るのは、黒鯛が底を釣るのに對して、ボラは底で團子が割れるとすぐ二三尺引上げ、宙で魚信を待つのです。

水郷附近の帆掛釣　やはり、夏から秋にかけての釣ですが、まことに雅趣のある鄕土色に富んだ釣技です。千葉、茨城地方の池沼や、河川などでよく見かけるのですが、釣果もすばらしいので職漁者もこの方法を採用してゐるやうです。

仕掛――先づ輕い木で七八寸の小舟を造り、それに經木かセルロイドで帆をこしらへます。その船に道糸を結ぶのですが、澁をした綿糸五十尋くらゐいります。此の道糸に二三尺の間隔を置いて釣素を結び、その結び目に唐辛子浮木か杉箸を二三寸に切つたものを結んで目じるしとします。釣素も綿糸の澁引か麻糸を使ひ、長さは四五寸でよろしい。鈎は二三分の丸袖型、餌はゴカイかミミズを二匹くらゐ刺します。バチなら一層よいでせう。



釣法――帆掛船を風上か潮上から流してやると、船の流れにつれて糸が順次くり出されて行きます。さうして五十尋ばかりの道糸が全部伸び切つたら、道糸の端を船の舷側なり、岸の杭なりに結びつけて魚信を待つのです。ボラは群泳してゐるものですから、一尾かゝると一しよに三尾も四尾もかゝり、暴れ廻つたりするのでなか〳〵面白いものです。魚信は目じるしの浮木が完全に吸ひ込まれたので見ればよく、そこを道糸を引いて引き寄せるのですから、釣技としては難かしいものではありません。

小鰡の吸ひ込み釣　これは最近各地でみかける釣技ですが、小鰡といつても時に三歳もの、なども來て、なか〳〵能率的な釣です。釣期も秋にかぎつたことはなく、初夏の頃川沼に上つた小鰡やイナを釣るのに適してゐます。海ではほとんど行はれてゐません。

仕掛――三間くらゐの强めの調子の竿に、五六厘柄の人造テグスを竿より一尺くらゐ長めにつけその先端に吸ひ込み仕掛を結ぶのです。それは半夕くらゐの玉錘を叩いて凸凹にし、その

上二寸五分くらゐの邊に、絹か麻の撚り糸二寸五分の兩端に鈎を結んだものを二つ折りにして三本つくり、道糸にしつかり結ぶのです。鈎は丸型の六七厘がよろしい。前記の凸凹にした錘に練り餌の團子を固めつけると、その周圍に六本の鈎がぶら下つて、練り餌を喰べに來た魚が鈎を吸ひ込むやうにした仕掛です。これは浮木釣で、胴のふくらんだ徳利型の浮木がよく、浮木下は一尺か一尺五寸、その日の游魚層に合はせてきめます。近頃釣具店に吸ひ込み用の仕掛として螺線を應用したものが出てゐますから、錘の代りに用ひてもよいでせう。練餌は糠に蛹粉、蝦粉などを混ぜ、つなぎとしてウドン粉か寒梅粉を混入します。

釣法――先づ仕掛を入れる前に練餌の團子だけを投げ込み、寄せ餌を利かせて置いてから仕掛を入れるので、海の飼着け釣の應用といへませう。やはり魚信は微妙ですが、浮木がヒヨイと水をくゞつた瞬間を合はせればよいのです。

落鮒釣

秋鮒の流し釣

殘暑も日毎に薄らぐ頃になると、水田や細流の淺場に産卵をすませたまゝ散開して夏を過し

た鮒は、秋の落し水にのつて細流から支流へ、支流から本流へと、乘つ込みとは逆のコースをとつて深場へ戻つて行きます。冬籠りの棲家を求める爲の行動です。これを釣人は落込み鮒とか、單に落鮒とかいつてゐます。

冬籠りに入る前には十分の榮養を身につけて置かなければなりません。で、夏の間はほとんど喰ひ氣のなかつた鮒も、落込みの狀態になると再び餌を追ふやうになるのです。とはいへ、乘つ込みの時のやうな活潑さは無論ありませんし、巣離れの時のやうな積極性もないのです。乘つ込み前の巣離れと、冬籠りの前の落込みとは、そのコースは逆になつても、何か似た感じがするやうに思はれますが、一方は一年中での大活躍期に入る前の動きであり、一方は靜止期に入る前の動きなのですから、おのづからそこに大きな差があるわけです。落鮒釣がむづかしいといはれるのは、そこに原因すると思ひます。

落鮒を釣るには、なんといつても釣場の選定が大切です。落ちて行く鮒の道を擁して、そこに餌を下ろして誘ふことが何よりなのです。で、乘つ込みに使つたしもり釣では面白くなく、樋門の落ち口などに並べ竿をして待ち構へるのも悪くはありませんが、何といつても最も此の季節に適した釣は、夫婦浮木の流し釣ではないかと思ひます。勿論、他の釣法でも釣れないわけではありません。が、最も効果も擧り、特色もあるところから、その流し釣を紹介する事にします。

竿――二間から二間半、しもり釣などの竿よりは、胴の硬めの先調子ものがよろしい。

道糸――一厘柄の人造テグス竿いつぱい。

浮木――唐辛子浮木を上につけ、五六寸間隔を置いて下に玉浮木を一個つけます。これを夫婦浮木といつてゐるのです。

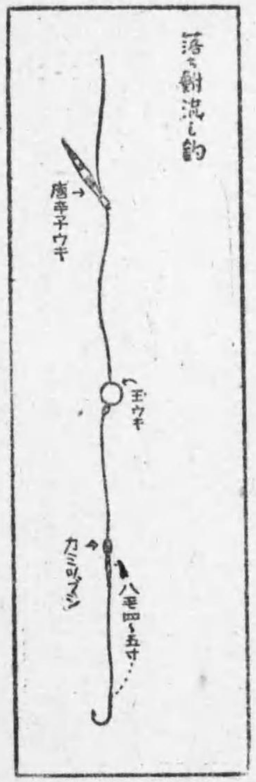
錘――板鉛を少量卷くか、小粒の嚙みつぶしを一個、道糸の先端につけます。

鈎素――本テグスの八毛、長さ四五寸。

鈎――丸型の五六厘か袖型の四五厘。

餌――縞みゝずか赤蟲。

此の釣技の特色は夫婦浮木にある事勿論です。親子浮木といふ人もありますが、玉浮木の大小をつけたものをもやはり親子浮木といふ人がありますから、これは夫婦浮木といふべきでせう。又さういつた方が妙味もあります。魚信は主として上の唐辛子浮木でみるのですが、玉浮木はその補ひをすると共に、流れ具合の調節に役立つので、いはゞ



内助の功といへませう。まさに夫婦浮木に違ひありません。

釣法――岸近くに藻や眞菰などのある所を、その出端に沿つて靜かに流すのです。しもり釣が面白くないのは、流れ方が早すぎるためで、流速よりは遲れ氣味に流れなければ落鮒は喰ひつきにくいのです。浮木下は餌が地底を曳きずるくらゐがよく、從つて底の沈積物や底藻にかかつたりしますから、その時には輕く竿先を煽つてやると、又外れて靜かに流れ出します。深がゝりして外れない時には、鈎素を引きちぎつて新らしい鈎をつけ替へます。その爲に細い鈎素を使つてゐるわけです。

よく秋鮒は型が小さいといひますが、秋口の鮒はたしかに小物が多いやうですけれど、秋が深まるに從つて型も相當よくなつて行くものです。それにつれて、釣場も細流から支流へ、支流から本流へと、次第に深場へ移して行かなければなりません。

流し釣の本質としては一本鈎がよいのですが、かゝりの邪魔をしない場所では二本鈎にするのもよろしい。然し、それは一度に二尾釣らうといふ慾からではないのです。錘の上三寸くらゐの所に二寸くらゐの短い鈎素にして股鈎をつけ、浮いてゐる鮒を探る爲の仕掛です。秋鮒は概して底にゐるものですが、妙に生溫いやうな日には少し上層に浮いてゐる事があります。そんな時には餌を少し上げた方が效果がありますから、此の上鈎をつけて釣らうといふわけなのです。

秋風にそよぐ薄のさゝやき、時折りけたゝましく鳴き渡る百舌鳥の聲は、ひとしほ秋の閑寂を深めるものです。その中にひたりながら、夫婦浮木のゆらめきを追つて野面を渉り歩く氣分はたまりません。句作などした事のない人でも、一寸一句出したくなつて來ます。釣果の多寡などはもう問題ではないではありませんか。

是非秋の鮎釣も味はつてみて下さい。

木の葉山女魚の釣

毛鈎の瀬流し釣

山女魚は中秋以後溪谷の水がグッと冷えて來ると、下流に向つて降つて行きます。下流といつたところで鮎のやうに下流までは行きませんが、多少とも水溫の高めな、水量のある所まで降つて冬籠りに入るのです。殊に此の傾向が前年の晩秋孵化した一年仔、前々年孵化した二年仔に多いのは、老成した魚ほどまだ身體ができてゐない爲、冷水に堪える力がないせいであらうと思ひます。で、その頃降る山女魚は三四寸から、せい〳〵で五六寸までの魚が多く、七寸八寸級の魚はあまり鈎にかゝりません。魚の型が小さいのでさういふ名前が生れたのか、或は

木の葉の散る頃釣れるのでさういふのか、そり頃の山女魚を、木の葉山女魚といつてゐるのです。

冬籠りに入る前の魚は、耐寒力をつける爲か、山女魚に限らずなか〳〵旺盛な食慾を漲らせてゐるもので、彼女達は勇敢に羽蟲に向つて飛びかゝるのです。その習性を見込んで生まれた釣技が、此の毛鈎の瀬流し釣なのであります。私は、前に夏のウグヒ釣十種のなかに、やはり毛鈎の瀬流し釣を記しました。それに酷似した釣技ではありますが、改めて山女魚の爲に記して置きます。

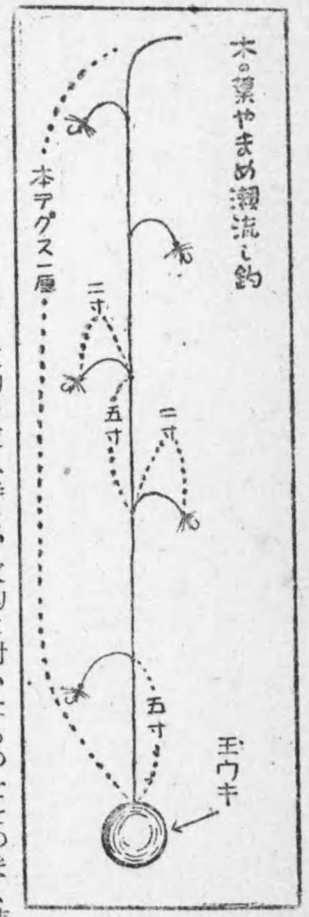
山女魚釣は難しい、なか〳〵釣り難い魚だといふことをしば〳〵いつてゐますけれど、此の木の葉山女魚の釣技はそれ程難しくはなく、しかも數に於いては四季を通じて最も能率のあがる釣なのです。

竿——雪代山女魚と同じものでよいのですが、木の葉山女魚は本流筋を釣る事がしば〳〵あるので、三間竿があればそれに越した事はないと思ひます。

道糸——一厘柄人造テグスの先に同じ柄の本テグスを一尋つなぎ、全長を竿より一二尺長めにします。

浮木——直徑四分くらゐの大型の玉浮木か、鼓型をした瀬釣浮木を道糸の先端に結びます。

毛鈎——この釣に用ひる毛鈎は、山女魚用の大型の毛鈎よりも、ウグヒ用の小型の毛鈎か、



鮎の蚊鈎の使ひ古しでもあればそれがよい。六七本は結びませう。

鈎素――八毛

柄本テグス二寸くらゐ。鮎の蚊鈎を使ふ時は、蚊鈎に附いたものをそのまゝ使つて差支へありません。これを道糸の先端の浮木から上へ、約五寸間隔を置いて枝鈎式につけるのです。此の點が、ウグヒ釣と異る特徴なのです。勿論ウグヒ釣と同じでもよいのですが、此の式の方が喰ひがよいのです。

釣法――私は雪代山女魚の項で、山女魚は下流から上流へ釣り上るのを原則とすると記しました。ところが此の釣は、逆に上流から下流へ釣り下つた方がよいのです。何故ならば、ウグヒと同じやうに瀬に向つて上流の方に振り込み、下流へと流しながら手前へ引いて來る釣り方ですから、釣り上つて行く事になると、ちやうど自分の今上つて來た所へ鈎を流す事になります。これでは敏感な山女魚を釣るのに面白くありません。足音や釣姿に、魚が警戒してしまつたところへ毛鈎が流れて來ても、何の效果もないわけです。それで上流から釣り下ると、まだ

足跡のない下流を流す事になつて具合がよいのです。然し、やはり魚は上流を向いて流れに乘りながら降るのですから、釣姿は、能ふ限り見せないやうに、叢蔭なり岩の蔭なりにひそむとか、なるべく腰を低くして竿を振るとか心懸くべきです。

對岸の上流に向つて振り込みますと、浮木が先づ水に落ち、その上にすらりと並んでゐる數本の毛鈎は、水とすれ〳〵か、手前の方にある毛鈎などは水の二三寸上方をかすめて流れるやうになります。中邊の毛鈎は瀬の上をヒヨイ〳〵と跳ねながら流れるでせう。その狀態が、山女魚には活きてゐる蟲に見えるらしいのです。中には勇敢に水から三四寸も上を離れて流れる毛鈎に、水音すさまじく跳びかゝる事もあつて、なか〳〵爽快な釣趣を覺えさせてくれるものです。うまく行くと一日に四五十尾の釣果になる事もありますが、魚影さへ相當にある溪流なら、先づ二三十尾は釣れるといつてよいと思ひます。

此の場合特に注意を要するのは、縣によつて漁業規定が捕獲し得る魚の寸法に制限を加へてゐる所のある事です。例へば岐阜縣、長野縣の如きがそれです。それは稚魚を保護する目的を以て定められたものですから、ぜひ守つてほしいと思ひます。たとへさういふ條令がないとしても、三寸以下の稚魚などは放してやらうではありませんか。木の葉山女魚は相當釣果が擧るのですから、そんなのは數の中に入れないでもよいでせう。もう一年待てば五寸を超えた立派な姿になつて、餌を追つてくれる魚なのです。

山村には山女魚や岩魚を釣つて生計を立ててゐる職漁者がゐるのです。山女魚や岩魚は釣人の儉樂の爲にのみあるのではなく、幾十人、幾百人、或は幾千人かの人がそれによつて生計を立ててゐる事を考へれば、私達が稚魚の濫獲をする事はさういふ人々の生活の資源を荒廢させる事になるのです。考へなければならない事だと思ひます。

落鮎釣

鮎の餌釣

鮎は盛夏を過ぎる頃から、ぼつ〳〵と下流へ降りはじめます。それは夏の間に膨らんだお腹の卵を産みつけて、子孫繁榮の本能を果たす爲の準備なのです。その地方々々の氣溫と水溫の關係で、降りに入る季節にも相違がありますが、大體八月下旬頃からはじまつて、遲い所でも九月下旬になれば上流地方には鮎がゐなくなるといつてよいでせう。その頃になると産卵に備へる爲か、淡白な食餌を好んでゐた鮎も、相當脂肪質のものを欲するやうになるとみえて、地方によつては餌釣が行はれるのです。四國、九州地方ではかなりむかしから餌釣が行はれてゐたやうですが、他の地方では、友釣や蚊鈎釣に壓倒されて、鮎は餌では釣れないものといふ觀

念が一般的になつてゐます。ところが此の落鮎期の餌釣は、釣趣からいつても、釣果からいつても、けつして他の鮎釣に劣るものではないのです。關東方面では伊豆半島の各地にのみ此の釣が行はれてゐるのは、その昔西方からの漂流民によつて此の地方が開かれたといふ、土俗學的な一參考資料になるのではないでせうか。

竿——二間前後の極めて軟かいものが必要、穗先も胴も軟調子でなければいけません。

道糸——八毛柄入造テグスの先に本テグスを一本つなぎ、全長は竿いつぱい。

錘——小粒の嚙みつぶし錘か、板鉛を少量卷きます。

鈎素——五毛柄の極上本テグス、長さは六七寸。

鈎——袖型の二三厘といふ極小型、一本鈎。小さい程よいやうです。

浮木——玉浮木の小粒を使ふ所もあり、水鳥の白羽を目じるしにつける所もありますが、原則としては全然浮木なしのフカシ釣です。

餌——伊豆半島ではカマスか鰺の身を小さくちぎつて鈎先に刺し、鈎が見えないやうにしてゐますが、四國では白魚(しらす)の頭部だけを鈎に刺してゐます。釣餌の他に撒餌が絶對に必要で、これはカマスなり鰺なり白魚なりを口の中にくわへ、齒で細かく嚙んで狙ひ場の水面に吹き飛ばしてやるのです。

釣法——釣場は、水深のある緩流か、多少流勢のある瀞で、瀞の釣には、仕掛を多少沈め加

減にし、緩流では水面上を流すか、水面下一尺くらゐの邊を流すかするのです。先づ撒餌をして暫く待つてゐると、鮎の姿が見えるくらゐに浮き上つて來て、時に何十といふ群が餌を競り合ふやうになります。その時、あまり音を立てぬやうに撒餌の中へ鈎を投げ込むのですが、當りは全く微妙なもので、竿先にククッと當つた時には大概もう遅く、僅かの異變が糸ふけに傳はつたら、それにすぐ合はせなければいけません。合はせるといつても、竿先をグッと煽るやうな强合はせは禁物です。何故なら秋の鮎は脂がのり切つて、三十匁、四十匁といふ大物が珍らしくはありませんし、それを釣る鈎素が五毛といふ細物ですから、强く合はせれば一度でプッと切られてしまひます。竿を後ろ上方に傾ける程度の合はせ方がよく、それに應へてかゝつた鮎は猛烈に走り出します。それを軟い竿で一杯にため、無理をしないやうに引寄せて手網で掬ふのです。

水の濁りのある時は、玉浮木を使つて中層を流すのも面白いでせう。此の場合も浮木を引き込んでから合はせたのでは遅く、流れてゐる浮木がふと止るとか、速度がふと變るとかいふ微妙な異變に合はせなければいけません。伊豆の仁科川では、トタン製の小舟を使つて舟釣を行ひますが、他の川では、岸の石の上などから川を見下すやうにして岡釣です。騒いだり、人影を見せたりする事は禁物、なるべく靜かにして釣つて下さい。

瀬づき鮎の友釣

早い所では九月中旬から、遅い所では十一月にかけて、鮎は下流の淺瀬に寄つて産卵にかゝります。これを「瀬づき鮎」とか「鮎が瀬づく」とかいつてゐます。多くは日沒以後、此の瀬づきが行はれるのですが、早朝や日暮れ近くにも見かけることがあり、一尾の雌鮎を中心に、何十、何百といふ雄鮎が、しぶきを上げんばかりに競り合ふのです。しかも極めて淺いザラ瀬が瀬づき場所になりますから、誰にもすぐそれと判るのです。

職漁者は此の瀬づき場所に徹夜で頑張り、長竿を揮つて掛釣などを行つて、一夜に三貫目も五貫目も漁果を擧げたりしますが、その仲間入りを我々がするのはどうかと思はれます。それよりも雌鮎を囮に使つての友釣程度で十分でせう。それでも徹夜で頑張れば、二貫目や三貫目は釣れることがあり、晝間だけやつてもどうかすると五十尾くらゐはかゝるのです。

鮎の雌雄識別法

雌

雄

鮎の雌雄識別法

鮎の雌雄識別は圖に示しましたが、その頃になれば雄鮎は見る影もなくどす黑くさびてゐますから、一目瞭然でせう。雌の方はまだ鮎としての艶を殘してゐるのです。

仕掛は、夏の友釣よりずつと頑丈に、竿の調子なども強くなければいけませんし、道糸も二厘柄、鈎素は三厘柄でよく、鈎は五六本大型のものを結びます。そうして下流の瀬づき場所の瀬に流して待つてゐると、やがて同時に二尾も三尾もかゝつたりするのです。雌鮎がかゝることは珍らしいくらゐですから、囮はいくら弱つても替へる必要がありません。弱つたら竿先であしらつて、時々一二尺瀬をひきずるやうにしてやるのです。

釣れた雄鮎は夏のやうに活かして置く必要がありませんが、もし雌鮎がかゝつたら、それこそ大切にいたわつて、次の囮に備へて置くのです。此の一尾の囮がその日の釣果を左右するといつてもよいでせう。

何しろ晩秋のことです。冷え込みが劇しいこととて、風邪などひきこまぬやう十分に注意して出かけて下さい。

公魚（ワカサギ）釣

公魚について

公魚が冬の釣界の人氣役者として登場してから、まだやつと十年くらゐなものでせう。それにしては、氷上の穴釣がなんと盛になつたものでせう。上州の榛名湖や、富士岳麓の山中湖、河口湖などがその名所となつてゐる爲、公魚を純淡水魚だと思つてゐる人も相當ある事と思ひます。ところが公魚は鱒や鮎などと同じやうに、産卵は淡鹹水の混り合ふ湖水や沼などで行はれますが、孵化した稚魚は海に降り、成魚となつて再び淡水に遡上して來る魚なのです。然し純淡水への順應性が非常に強いので、これを前記のやうな山間湖に移殖してみますと、そこでも立派に産卵も孵化も行はれ、終生を淡水中で過すやうになるのです。

魚學的の所屬は鮎と同じ硬骨類等椎目で、わかさぎ科のわかさぎ屬となつてゐます。分布範圍は北は遠くベーリング海から、本邦附近では樺太、千島、東北地方から關東の北部に及び、關東以南には自然分布は見られません。日本海方面では北陸から山陰地方にまで及んでゐますのは、日本海に寒流が影響してゐる爲で、此の魚は寒流魚といへませう。鮎は水の溫む三四月

頃から川へ遡上しますが、公魚は水の冷え込む晩秋の頃に遡上し、翌年の二月頃水草や砂地に産卵するのですが、産卵後は鮎と同じく斃死してしまふ一年魚です。

よく見ると體形も鮎の稚魚に酷似して、淡水中ではよく發育しても五寸止り、普通は二三寸といふところですが、北海道方面の海で獲れるものには七寸近いものがあります。東北、北海道方面で鰶（チカ）といはれ、近頃は冷凍されて東京方面にもかなり出荷されてゐます。その他北陸の石川、福井縣ではアマサギ、新潟縣ではシラウヲ、シロヨ、山陰ではエラサギ、サマサギ等といつてゐるさうです。

今日移殖が行はれてゐる淡水湖は、岳麓五湖のうちの山中、河口、精進、四尾連等の四湖、上州の榛名湖、信州の諏訪湖、松原湖、野尻湖、青木湖、木崎湖、箱根の蘆の湖等、その他かなり廣く各地の擴まつてゐる樣子です。冬期結氷するやうな寒湖ほど成績がよい樣子です。即ち、氷上穴釣が生まれた所以なのです。諏訪湖の穴釣を、まことしやかに記した釣書がありますが、どういふものか諏訪湖では結氷してしまふと全く釣れなくなつてしまつたのです。ところが湖畔に居を構へる正木不如丘博士が數年に亘つて試釣した結果、先年はじめて氷上釣に成功したさうです。博士の話では適水溫の場所さへみつければよいのだといふことです。

結氷前の十月から十一月にかけて、湖上に船を浮かべて長竿釣が行はれてゐますが、その方は前からすばらしい釣果があがつてゐるのです。

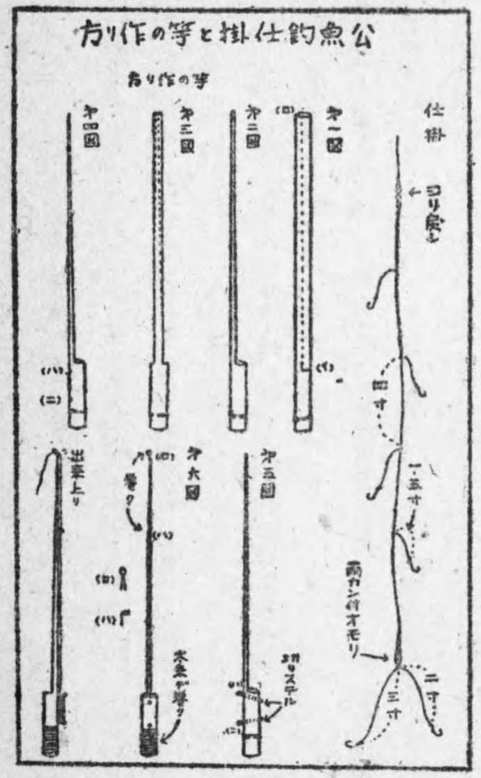
山湖の氷上穴釣

寒いだらうなどといつてゐる人には向かない釣ですが、今時の若い者が、そんな事をいつて家の中にすくんでゐる時代ではありません。進んで寒苦の中に身を投じ、そこに樂しみを求めるべきだと思ひます。私はもう五十といふ聲を聞く年になりましたが、毎年二三度は必ず氷上にのり出してゐます。此の釣をはじめる迄は、雪や氷の上に自から出てみるなどといふ事はなかつたのですが、それ以來冬の酷寒を期待するやうになりました。釣場には、私よりも年長の釣人が多勢ゐます。そして寒さを忘れて釣りまくつてゐます。なんと賴母しい傾向でせう。あの可愛いらしい魚が、一度に三尾も四尾も鈎にかゝつて來ると、もう寒さや冷たさなどはなくなつてしまふのです。そこに釣のよさがあるといへませう。

此の釣は婦人にも子供にもできるのですから、近くに釣場を惠まれてゐる方は、一家總出で氷に親しんで下さい。俗に、肺病の藥になるなどといはれるくらゐ、カロリーの高い魚が釣れて、しかも健康が購はれるのですから、こんなよい事はないではありませんか。時局克服の釣ともいへるでせう。先づ仕掛を說くに先立つて、公魚竿の手製法から記しませう。

竿の製法――材料は直徑五六分、長さ二尺くらゐの竹一本あればよいのです。先づ第一圖のやうに（イ）の部分に鋸目を入れ、（ロ）から小刀を入れて點線のやうに裂き、第二圖のやうなものを

作ります。第三圖はそれを背から見た圖ですが、點線に示すやうに先細に削り、背中の皮を殘して肉の方も薄くそぎ、先端を軟かくするのです。第四圖は横から見た圖ですが、（ハ）と（ニ）の邊に三ツ目錐で反對側までぬける孔をあけます。孔の角度は第五圖の横から見た圖に點線で示した如く、先つぼみにあけなければいけません。そして最初に裂きとつた竹の餘りで、太めの竹釘を作り、（ハ）、（ニ）の孔にしつかりさし込み、裏側にぬけた部分を切り捨てます。これが糸卷になるのです。次に第六圖の（ロ）と（ハ）のやうな環を細い針金でこしらへ、竿先と（ハ）の部分とにしつかりと糸で卷き止めるのです。そして最後に（イ）の部分を太めの糸で卷いて握り易くするのです。これで出來上りました。



道糸――一厘柄の人造テグス十尋ばかりを糸卷に卷き、先端を穗先にぬいて置きます。そして小型の撚り戻しを結びつけます。その

下にやはり一厘柄の本テグス一本（約四尺）を先糸につなぎます。

錘――天地に兩環の附いた紡錐型の錘、重さは水深によつて一匁か二匁くらゐ。

鈎素――八毛柄の本テグス五寸の兩端に鈎を結び、三寸に二寸くらゐのところを錘下の環に結びつけて下鈎とし、他に一寸五分くらゐの枝鈎を錘上に、四寸くらゐの間隔を置いて五六本つけます。此の結び方は鈎素が上方に向くやうに結ばなければいけません。

鈎――袖型一厘のタナゴ鈎。近頃公魚用の蚊鈎が市販されてゐますが、これもなか〳〵好成績の事があります。

餌――サバの蟲（サシ）の紅で染めたものがよく、これを紅サシといつてゐます。鈎先にチョンガケにしてもよいのですが、盗られ易いと思つたら頭から刺し通して、尻に鈎先を出して置きます。

釣法――氷上に一尺四方くらゐの穴をあけ、そこに仕掛を下ろして、錘がトンと底に届いたところで糸の長さをきめ、靜かに一尺くらゐの間を上下するやう竿先を上げたり下げたりしてゐると、やがてツン〳〵といつた魚信が傳はつて來ます。強く合はせると公魚の口が切れて逃げられますから、僅かに竿先を上げる程度の合はせでよろしい。それから竿を傍に置いて糸を手繰るのですが、急ぐ必要はないのです。むしろ最初はゆつくりと上げた方がよく、さうしてゐると途中で又次の魚が追つて來て、他の鈎に喰ひつき、一度に二尾も三尾も釣れて來るので

す。撚り戻しまで手繰り上げたら、そこを摘んですつと水から抜き上げ、傍の氷上で二三度振ると大概外れ落ちますが、外れない魚は片手で引きちぎるやうにすれば口が裂けてすぐにとれてしまひます。一尾づゝ丁寧に外してゐたのでは能率が擧りません。魚はそのまゝ氷上に放つて置けば、たちまちコチ〳〵の冷凍魚になつてしまひます。

餌は一々つけかへなくとも、一度附けただけで盗まれさへしなければ半日位持つ事もありますが、時々調べてみて、中味が透きとほるやうになつてゐるのは附けかへた方がよろしい。

設備の整つた釣場では、風除け小屋を貸してくれますし、手提げ火鉢の準備もあり、穴を掘る世話人もつめてゐますから便利ですが、それは榛名湖、山中湖くらゐなもので、他の土地ではほとんど何の設備もない所が多いので、懐爐くらゐは用意して行つた方がよいでせう。防寒具を十分持つて行く事はいふ迄もありません。足が非常に冷たいものですが、靴下を二三枚はいて、その間に唐辛子をもんで入れて置くと相當しのげるものです。それから灰ふるひのやうなものを持つて行つて、穴の表面に張る薄氷を始終すくひとらないと、たちまち穴が氷で埋つてしまひます。

結氷前の竿釣も仕掛は同じ事ですが、二間前後の軟かい竿に、竿いつぱいの道糸にして、上下してゐればよいので、釣味は氷上釣よりはよいかもしれません。しかし、なんといつても公魚釣は、氣分的にも氷上で釣りたいと思ひます。朝夕のまづめが勝負のきまる大切な時ですか

ら、爽昧の頃氷湖上に乗り出して行くわけで、樹氷に飾られた湖畔の眺めなど何ともいひやうがありません。まさに清淨そのものといふべきでせう。

氷上釣の心得

氷上釣にとつて、最も關心を拂はなければならない事は、氷厚の問題です。氷厚の不十分な時氷上に乗り出して、公魚と心中するなどはまことに愚かな事ですから、一應その點を調べた上で出釣して下さい。スケートの練習に出かけた傍らこの釣をするのもよいものですが、スケート場で氷上釣をさせるところでは、釣場とスケート場との限界が定められてあります。それを冒してスケート場内に穴をあけたりすると、知らずに滑つて來た人が落ち込んだりして、思はぬ悲劇を惹起する事がありますから、決して限界を犯さぬやう、又湖上には風の吹き廻しなどで、特に結氷の薄い所があるものです。さういふ場所は豫め確めて置くべきです。

スケートの心得のある人は氷上の歩き方も上手ですが、知らない人はよくスツテンコロリと轉がつたりします。革靴、ゴム靴は殊に滑り易いものですから、必ず金のカンヂキをつけるか底から胴にかけて藁縄で三卷四卷するなりして、滑りを止めて置かなければいけません。拍子にのつて滑るので、とても痛い思ひをしますし、轉び具合によつては腦震盪を起さないとも限りません。藁縄を卷いて爪先で小刻みに歩くやうにすれば、うまく歩けるものです。

爽昧のまだ薄暗い時や、薄暮の足許が暗くなつてから湖上を歩く時には、釣穴に氣をつけて歩いて下さい。まだ雪の降らない油氷の時には滑る危險があり、雪が積つてからは滑る危險がなくなる代りに、釣穴の存在が不明瞭になります。滑らないからといつて、元氣にまかせて急いだりしない事です。

それから山湖の公魚は天然魚ではなく、移殖された魚の事ですから、それ相應の經費なり手數なりがかけられてゐる事を考へ、土地の人々への感謝を常に忘れず樂しんで下さい。その感謝さへ持つてゐれば、濫獲もつゝしむでせうし、釣場を荒すやうな不心得もできなくなるわけだと思ひます。

鰒（タナゴ）釣

タナゴについて

嚴冬の鰒釣が釣人の血を沸き立たせるのは、東京附近だけのやうに思はれます。他の土地では全く雜魚として顧みる人もない此の小魚に、どういふわけで東京釣人だけが血道をあげるのでせう。それは何といつても江戸の昔から傳はる歷史の力であると思ひます。

何時の頃から江戸の鯛釣が名物になつたものか、その發祥は詳かでありませんが、江戸時代の古文獻にはしば〳〵その事が現れてゐるのです。深川木場の材木堀で、大名、旗本、或は分限者などが、筏の上に金屏風を立てめぐらせ、緋毛氈を敷かせて座を占め、短い象牙穂の棧取竿（さんとりさを）といふ華奢な竿をつまんで鯛を釣る錦繪なども殘されて居ります。釣素には處女の髪の毛がよいなどといはれ、大名が腰元の中から處女を選んで伴につれ、木場迫ひをしたなどといふ挿話もあるのです。

元來、凝り性の多い江戸つ子の事ですから、さうして何百年の歴史を經る間に、どうすれば鯛を最も面白く釣る事ができるかといふ技術的の研究が積まれ、今日のタナゴ釣が殘つたわけなので、他の鮒や鯉などを釣るやうなつもりで釣つたのでは、更に興の湧かない此の小魚を、實によく極めつくした釣技であると思ひます。他の土地で鯛が顧みられない理由は、鯛に適した釣技を持つてゐないせいであると思ふのです。

鯛といふ魚は四五月頃細流に乘り込んで烏貝の中に産卵し、貝の中で孵化した稚魚は鱗の間に烏貝の卵を挾んで泳ぎ出し、相互繁殖をするといふ事ですが、秋冷から嚴寒の候が生殖前の活動期に當る爲、冬期に最も食慾が旺盛になり、盛に食餌を追ふやうになるのです。で、鯛釣は岸邊に薄氷の張りつめる頃、朔風を突いて野川を漁り廻るのですから、これが心身の鍛錬にどれくらゐ役立つ事かしれません。

鯛の魚學的所屬は硬骨類内顎目中のこひ科のたなご屬となつてゐて、東京釣人に騷がれるタナゴの他に、ヤリタナゴ、イチモンジタナゴ、モリヲカタナゴ、カネヒラなどがありますし、ゼニタナゴといふのもありますがこれは別種の魚で、たなご屬ではありません。然し一般には同じやうに思はれてゐて、美しい彩りを持つてゐるところから、オカメタナゴ、ベンテンタナゴ、オタフクタナゴなどともいはれて居ります。地方的の俗名を調べてみますと、水戸では雄魚をアカベラ、雌魚をシロベラといひますが、雄は生殖期に紅い婚姻色を呈する爲でせう。岐阜方面ではセンバラ、美濃の一部でボテといひますが、此のボテといふ名は他の土地でもよくいはれる名前です。京都附近でムシブナといふ人もありますし、秋田でエガタナゴ、信州、九州方面でニガブナ、四國でニガシなどといはれるのは、ゼニタナゴに苦味があるせいではないかと思はれます。

さて、釣技の解説に移りますが、タナゴ釣は大別して脈釣と浮木釣との二種に分けられて居ります。

タナゴの脈釣

タナゴ釣といへば誰しも先づ脈釣を聯想する程、これが原則的な釣技となつてゐるのです。一寸かせいぐ〳〵二寸ばかりの小魚ゐくせに、小粋な當りを感じさせるところに此の釣の生命が

あるといへませう。

竿――普通は全長六七尺の小繼ぎの竿で、胴には全く調子がなく、鯨穂の穂先だけに僅かに調子をつけたものですが、近頃は小繼の竿がかなり高價になつてゐますから、強ひてそんな竿を求める要はありません。然し、延竿ではどうしても胴に調子がつきますから、そこの工夫をして自製で繼竿にしてみてはどうでせうか。

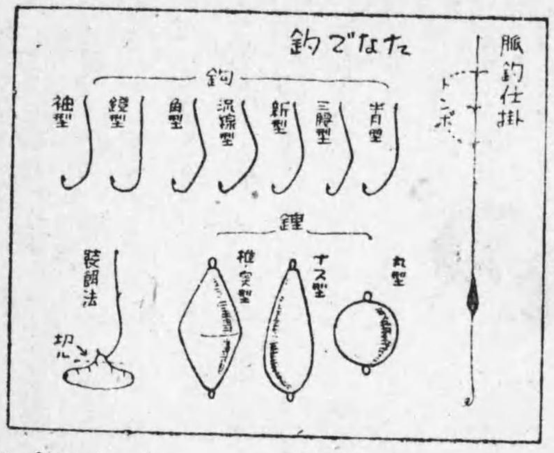
道糸――八毛の本テグスを白髪染めで黒く染めたものを上に附け、下六寸は白いまゝの八毛本テグスにし、長さは竿よりもやゝ短かめにします。その先端に結んだ錘が、片手で竿を握つたまゝ摘まめるやうにするのです。

錘――玉型、茄子型、椎の實型などありますが、要は水の抵抗を最少限度に止める事にあるので、茄子型か椎の實型がよいやうに思ひます。重さは一匁から二匁、何れも兩環附でなければいけません。道糸に結ぶのには、松葉の輪にしてしめず、ぢか結びにした方が當りが見まいのです。

鈎素――普通の仕掛とは逆に人造テグスの極細物を使ひます。それは水に濡れて軟くなるから、吸ひ込み易いせいなのです。長さは七分から一寸くらゐ、上を松葉の輪にして置き、錘の下の環にとりつけます。

鈎――半月型、三腰型、新型、流線型、角型、鐙型、袖型等色々ありますが、何れも一厘くらゐの極小型を選びます。昔はわざ〳〵自分で燒きを入れて好みの形に造り直したものですが、今日では市販品に優れたものがありますからその必要はありません。

大體以上でよいのですが、魚信を早く見取る爲に、道糸の途中にトンボと稱する目じるしを結びます。



トンボ――五厘柄くらゐの本テグスの白根（普通は切り捨ててしまふ根の部分）を湯に浸して軟かにし、黒染道糸の途中に結び附け、兩端を一分五厘位殘して切りとります。これを一寸間隔くらゐに三個所取りつけます。時には深度を計る目安にもするのですから、あまり上に附けたのでは意味をなしません。近頃はセルロイド製のトンボも賣つてゐます。

仕掛はこれで整ひましたが、以上の他に小型の鋏を必ず持參して、魚桶の紐にぶら下げて置いて下さい。魚桶は小型のものを胸の前にぶら下げて持ち歩くのです。餌箱も魚桶に取り附けるやうにして下さい。終始移動しながら釣り歩くのですからなるべく總ての持物を身體に附

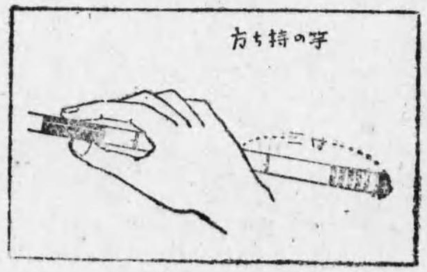
けて置くべきです。

餌――私が少年時代に深川の木場で釣つた頃には、飯粒に糠をまぶしただけで澤山釣れたのですが、近頃は玉蟲といふ絶好の餌が發見されて以來、タナゴ餌は玉蟲と折紙が附いてしまひました。玉蟲は柳の枝や梅の小枝に寄生し、卵型の固い殼の中にゐるイラガといふ蛾の幼蟲です。東京では釣具店に賣つてゐますが、野道を歩くとよく見かける蟲です。出漁の前夜二十個ばかり殼から取り出し、黒い頭の部分を切り去つて新聞紙の上に並べ、ざつと汁氣を絞つてから別の紙の間に並べて餌箱に入れて置くのです。裝餌するのには軟い腹の方の皮に鈎先をちよいとかけ、少し引張り上げると皮が山形にひきつれますから、そこをプツリと刺しぬいてその下を切るのです。（圖解參照）さうすると二枚の皮の間に僅かに汁氣が殘つてゐるので、それが水に散つて喰ひ氣を誘ふのです。

釣法――狙ひ場としては橋脚まわりの澱み、護岸の亂杭の蔭、沈礁の間、古舟の沈んでゐる蔭、水門際の澱み、藻や水草の端、農家の洗ひ場附近、湧水の流れ出してゐる附近等ですが、さういふ場所を見つけたらなるべく足音を忍ばせて岸に歩み寄り、周圍が開けてゐれば腰をかがめるやうにして竿を出すのです。魚は人影を見るとパツと散りますが、間もなく又戻つて來ますから、一呼吸してから仕掛を落した方がよろしい。

さて、竿の持ち方ですが、他の釣と違つてほとんど無調子の竿を手先の加減で釣るのですか

ら、鮒などのやうに竿をギユツと握つてしまつてはいけません。竿尻三寸ばかり殘した邊を小指と藥指とで支へるやうに握り、拇指には僅かに預ける程度にもたせかけ、それを人差指と中指とが蓋をするといつた具合に、手の中で竿が柔かく遊んでゐなければいけないのです。そして手首は極めて自由にして、前方に竿を差出しながら、竿先をやゝ左方に向けて倒すのです。錘をポシヤンと音を立てて入れてはいけません。靜かに落し込んでトンと底に着いたら一寸ほど上げて、流れのまゝに下流へ竿先を送りながら當りを待ちます。當りといつたところで竿先でみるのではなく、例のトンボに賴るのです。クルリと半廻轉、或は一廻轉する事もありますが、とにかく何か異變があつたらすぐ二三寸竿先を上げて聽いてみます。キユツキユと抵抗があればもう魚がかゝつてゐるのですから、そのまゝ竿を立てて引き上げ、左手に魚を掴み、右の竿を持つ手の人差指と拇指とで鈎素を持つて引けば、軟い口吻が切れて鈎が外れます。餌はそのまゝ又指を放して次の魚を狙ふのです。白くふやけてしまはない限り、一度裝餌したまゝ八尾でも十尾でも釣つて差支へありません。



喰ひ立つて來た時には、一々トンボに賴る必要はなく、底に錘を落して一寸上げる、餌が止つたと思つたら聽いてみる、キユウと來るといふ具合に能率を上げて行きます。かういふ小魚

を釣る興味は、何といつても數にあるのですから、能率を上げる事を心がけなければいけません。わざ〳〵底まで錘を落さず、トンボの目じるしで水深が判るわけですから、適當の所まで沈めてすぐ聽いてみるくらゐでよいのです。

魚影の見える所では見釣の方が早いと思ひます。群れてゐる中へ直接鈎を入れず、少し離れた所に落してから、群の方へ靜かに曳いて行くと、白く見えてゐた餌がふと見えなくなれば、それはもう魚の口の中に入つてゐるのですから、すぐに上げてしまへばよろしい。さうして釣れなくなつたら次に移るといふわけで、次から次へと野川を傳つて行くのです。

タナゴの浮木釣

數はともかく、悠々とタナゴの小粋な引き味を樂しまうといふのには、此の浮木釣をすゝめます。浮木釣といつても鮒のやうに並べ釣をするのではなく、敏捷な小魚を狙ふのですから、一本竿の探り釣で、相當樂しい苦心が要るのです。それに浮木釣は大タナゴが、といつても二寸か二寸五分の小魚ですが、それでも柄に似合はぬ引き味を滿喫させてくれるので、一入の釣趣といへませう。

竿——九尺から二間くらゐの胴から先に調子をもつた輕いもの、鮒竿で十分間に合ひます。

道糸——一厘柄の黑染人造テグスの先に、八毛の本テグスを一本結び、長さは竿一杯。

錘——道糸の先を松葉の輪に結び、その結び目に板鉛を小量卷きつけます。

鈎素——極細人造テグス一寸。

鈎——脈釣と同じです。

浮木——二分玉の玉浮木二個、或は唐辛子浮木の下に小さい玉浮木を用ひる夫婦浮木、浮木下は餌が地底すれ〳〵に流れるやうにします。

餌——前と同じです。

釣法——こゝぞと思ふ狙ひ場の少し上手に仕掛を入れるのですが、鮒のやうにいつぱいに振り込まず、竿を前に倒して竿先に煽りをくれて送り込むやうにして下さい。餌が落着くと靜かに浮木が流れますが、その浮木がふと止つたり、クッと引かれたり、スーッと浮き上つたり、僅かな異變でもあれば魚信とみて、竿先を四五寸上げて聽いてみます。それにキュウッと抵抗があればそのまゝ引き寄せるのですが、相當の深所から引き上げる快味は格別です。

さうして二三尾釣るうちに、その邊にゐた魚が餌をみかけて集つて來て、ほとんど入れ喰ひになる事がありますが、さうなつたらもう浮木にたよらず、餌が底に落着いた時にはもう喰つてゐるものとみて、すぐ竿先を上げて聽いてみるのです。總てタナゴ釣は最初のうちこそ浮木やトンボにたよりますが、後は感で能率を上げて行かなければ面白くありません。そこに寒さを忘れて此の小魚を釣る醍醐味があるといへませう。

寒鮒釣

寒鮒の並べ釣

鮒釣こそ文字通りピンからきりまであります。釣は鮒に始まつて鮒に終るといはれるのもそのためで、陽春の乘つ込み釣が初歩の入門釣であるのに、寒鮒は釣の奥の手といへるのです。乘つ込みで鮒釣の味を覺え、それからあれも釣つたこれも釣つたといろ〳〵な釣をやつてみた擧句、最後には又鮒に戻つて寒鮒に血道をあげるといふ釣士が、現在も相當にあるのです。寒鮒釣はそれほどむつかしい釣かといふと、私は決してむつかしいものではないと思ひます。單にむつかしいといふだけなら、他にもつとむつかしい釣はいくらもあるのです。ではなぜ寒鮒釣が奥の手であるかといふと、釣技の難易といふよりは釣をする心構えの奥の手、つまり釣技よりは釣道の奥義を寒鮒によつて體得する、そこに寒鮒釣の最も大きな意義があると思ふのです。

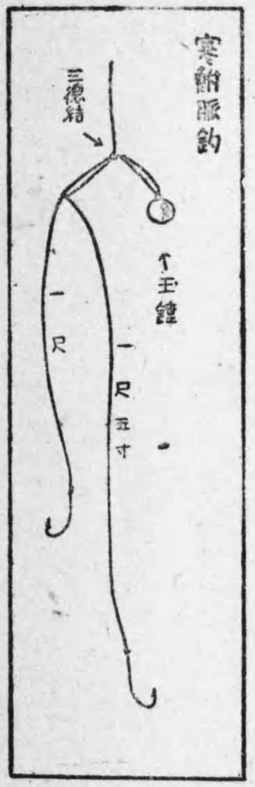
寒鮒は全く釣れないものです。二日通つても三日通つても、一尾の漁果もなく、空魚籠を提げて歸るやうな事もしば〳〵あるものです。時は寒中の事ではあり、風除けもない吹き晒しに

腰を据え、終日つくねんと竿先をにらんで過す。釣の味をほんとうに心得ない人から見れば、此の寒空になんといふバカな奴だらうといふ事になるでせう。ところが竿心一體となつて三昧境に入つてしまへば、寒さもなければ、時の經過もありません。それは悟道に近いと思ひます。禪にも等しいと思ひます。知らず識らずの間に耐寒力も備はつて來ますし、倦怠感を征服する意力の涵養にもなるのです。

最初から釣れないときまつてゐれば、誰も寒い思ひをして出かける者はありません。ところが時に尺鮒が二尾も三尾も續けて釣れたりして、終生忘れられない思ひ出をこしらへてくれる事があるのです。一刻の油斷もできません。何時竿に來るかもしれない當りを期待して、全魂をそこに集注する。慾得ではできない事です。そこに寒鮒釣の貴さがあるといへませう。

さて、寒鮒釣にも浮木の並べ釣と、脈の並べ釣とがあり、巣離れに述べたづき釣で探り歩いてみるのも悪くはありませんが、昔から寒鮒は脈で釣るのを常道としてゐます。初心のうちは脈の當りがとりにくいといふこともありますから、最初は浮木で並べ釣を行ひ、寒鮒の味が判り出してから脈釣に入るのもよいでせ

寒鮒脈釣



う。浮木の並べ釣は春の鮒と大して變りませんから省くとして、こゝには胴の並べ釣を記しませう。

竿――二間から二間半の胴の多少硬めの軟調子竿がよろしい。三四本以上ほしいと思ひます。

道糸――人造テグスの一厘柄の先に同じ太さの本テグスを一本つなぎ、竿よりも一二尺長くします。そして先端を三德結びにします。

錘――流速により一匁から五匁くらゐまでを使ひ分けませう。

鈎素――八毛か一厘柄の本テグス、一尺と一尺五寸くらゐの二本鈎。

鈎――袖型、丸型、鐙型等の三厘乃至五厘。

餌――縞ミミズ、ボッタ、赤虫等。汐入りの川ではゴカイ、イトメに喰ひが立ちます。

これは船釣を主としたものですが、岡釣の場合はもつと長い竿がほしくなり、逆に道糸は多少つめなければならないといふ事になります。寒鮒の岡釣は釣場の選定がむつかしいので、先づづき釣で探つて都合のよい寄り場をみつけ、そこに落着いて並べ釣に替る方がよいでせう。

然し、寒鮒釣は船の方が味があります。船頭などは要りません。自分で漕いで思ふ所に河岸づけ、そこでぢつと頑張ればよいのです。狙ふ場所は底が柔らかい泥土のところ、流れのあまり速くないところ、底がかけ上りになつたところ、枯藻の沈積したやうなところなどで、それは

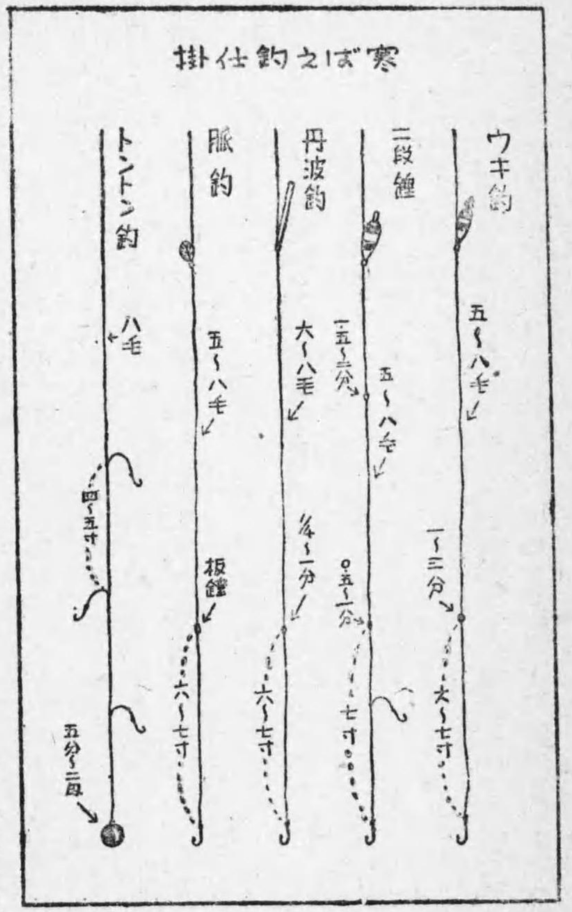
錘を落してみれば大概見當がつきませう。

釣法――竿いつぱいに仕掛を振り込み、道糸をピンと張らせるやうにして竿掛に竿を並べ、竿先に來る當りを待つのです。他の季節の鮒よりも鈍い當りですから、十分注意をしてゐなければなりません。然し、あわてて早合はせをする必要はありませんから、ゆつくり構へて落着いて釣る事です。當りがなければ時々一本づゝ竿を打ちかへして、その都度餌を調べて下さい。釣れないからといつて無闇と船を動かさない方がよろしい。たとへ鮒が底にゐたとしても、寒の鮒はよほど氣が向かないと餌をくわへませんが、何時喰ひ氣を催すかしれないのです。船を動かせば折角そこにゐる鮒もびつくりして逃げ出します。なんといつても寒鮒釣は辛棒が第一です。さうして釣れた鮒の有難さはなんともいひやうがないものです。

寒バエ釣（オヒカハ釣）

寒中のハエ釣

關西でもハエ（オヒカハ）釣の一般的な最盛期といへば四月から六月頃の梅雨にかけた頃ですが、近年寒中にハエを釣る事がすばらしい勢ひで盛になつて來ました。ハエは冬になると水



仕掛や竿は盛期もさしてかはりはありませんが、なるべく微妙な仕掛を選ぶことはもちろんです。ここに關西式のハヱ釣を紹介して置くことにします。大體關西のはハヱ釣に次の五つの式があるといへませう。即ち普通の浮木釣、二段錘の浮木釣、丹波釣、脈釣、トントン釣です。

竿――總て軟調子の二間乃至二間半、笛卷などになつた高級品の繼竿がありますが、さういふ竿でなければ釣れないわけではありません。要は竿全體の調子にあるのですから、その選定をあやまらぬやう。

道糸――浮木釣、二段錘、丹波釣は何れも浮木釣の變型ですから細物を選びます。人造テグスのなるべく細いものの先に、五毛乃至八毛柄の本テグス一本をつなぎ、長さは竿いつぱいにします。脈釣は七八毛柄、トントン釣は錘が重いので八毛柄がよろしい。

鈎素――總て道糸よりやゝ細めの本テグス、長さは何れも六七寸、トントン釣だけは一寸五分か二寸にして三本枝にします。

錘――浮木釣は一文乃至三文（分）の嚙みつぶし錘、二段錘には上に一文半乃至二文、下に半文乃至一文のものを二段につけます。丹波釣は浮木が非常に輕く微妙なので、四分の一文から一文くらゐの輕い錘を浮木に合はせて選びます。脈釣には小量の板錘がよく、トントン釣には五文から二匁迄のものを流速に合はせて用ひます。

浮木――普通の浮木釣と二段錘とは俗にいはれるハヱ浮木、二段錘には多少大きめがよろしい。丹波釣は丹波浮木、脈釣には浮木の代りに水鳥の羽根を目じるしに用ひます。

以上は圖解によつて詳しく御承知願ひたい。

餌――寒バヱは非常に餌づきが悪いので餌に相當苦心を要します。何といつてもオセコとかオヘコとかいはれてゐる川虫（カゲロウの幼虫）が最上ですが、寒冷な水の中に入つて採集し

溫の高い深みへ逃避し、食慾もグッと落ちてしまふので、非常に釣りにくくなるのですが、その悪條件を克服し、釣にくい魚を釣るといふところに格別の興が湧くのです。

なければならないので、相當以上の勇氣を要します。それに次いではチシヤの虫です。これはチシヤの木の實に巣喰つてゐる小さな幼虫ですが、これもなか〳〵手に入りません。釣具店に賴んで置けば時に手に入るくらゐでせう。栗虫もなか〳〵よいし、サシでも釣れないわけではないのです。又焙糠に蝦粉や蛹粉、ウドン粉などを混ぜた練餌の團子が効を奏する事もあるのです。奈良方面では奈良漬の酒粕をそれに混ぜて效果を上げてゐるといふ事です。何れにしても釣餌の他に練餌を用意して行つて、撒餌を使つて食ひ氣を誘發する事は必要です。

次に大切な事は釣場の選定です。むしろこれが一番大切な問題かもしれません。要するにハエの冬籠り場所を搜し出す事が大切なのです。寒中になるとハエはほとんど瀨に出てゐません。なるべく水の溫みのある所に集團となつてゐるのですから、うまくさういふ場所に當つて喰ひ氣を誘へば、それこそ一個所で思はぬ大釣にぶつかる事があるのです。そんな時の嬉しさは全くたとへやうもありません。寒さも何も消し飛んで、有頂點になつてしまふのです。

では、どういふ場所を狙へばよいか。底石のゴロ〳〵してゐるやうな深い淵、トロリとした深みのある緩流で所々に大石の散在する場所、沈床廻りの深み、それから溫い湧水の出る附近等で、夏の間に此の湧水の出る場所を見定めて置いてそこを狙へば一番確かでせう。それから又、日當りのよい場所を選ぶといふ事も一つのコツといへませう。

寒中の磯釣

海苔餌の釣

冬に入ると多くの海魚は深場に落ちて、冬籠りの狀態に入つてしまふので、遠く沖出して船釣でもしない限り、沿岸の釣物がまことに少くなつてしまふのです。で、海の釣士も冬眠狀態に入らざるを得ないのですが、たゞ一つすばらしい釣物が殘されてゐる事を忘れてはいけません。卽ち寒中の荒磯釣がそれです。

武鯛やメジナは水が冷え込むと、好んで植物質の餌を攝るやうになり、岩礁に寄生する海藻類の新芽を狙つてしきりに活躍を開始します。殊に十一月の下旬頃に新芽をふき出すハバ海苔といふ海藻がありますが、これが大好物らしいのです。ハバ海苔といふのは十分に成長しても巾五六分、長さ四五寸止りにしか育たない海藻で、ちやうど若布と海苔との合の子のやうなものですが、その味がすばらしく、私は魚の上前をはねて持歸り、三杯酢で喰べるのを冬の樂しみにしてゐます。嗜好が魚に近寄つたのかもしれません。漁村ではこれを單にハンバといつたり、ハンバ海苔といつたりして、やはり食料にしてゐる樣子ですが、採れる量が少いせいか都

會には全く入つて來てゐません。

此の海苔を餌にして釣る寒ブダイ、寒メジナが、近年非常な人氣を呼んでゐます。他に釣物が少いせいもありませうが、磯釣に行つて餌盗りのフグの襲撃を受けるのは實に不愉快なものですけれど、此の海苔餌にはフグが絶對につかないので、まことに氣安く釣氣分が樂しめるのです。私は磯釣をむしろ眞冬のものと心得て、十二月、一月、二月の寒中になると必ず出かけてゐます。その釣場が南國の磯の事ですから、都會にゐるやうな寒さもなく、避寒氣分で釣が樂しめるといふ、一舉兩得もあるといふわけなのです。

仕掛は夏の磯釣と別に變りませんが、ハバ海苔の裝餌が少し面倒ですから、それを詳しく記してみますと、先づ海苔の揃つたものを五六枚重ね、その根元を豫め用意して行つた女の髪の毛の屑で卷きしめます。そしてあまり長すぎぬやう二寸くらゐの長さに先を切るのです。鈎は髪の毛で卷いた所へ下から刺し込みます。これが本餌で、此の他に撒餌用としてホンダワラのやうな雜海藻と、薩摩藷をふかしたものを用意して行き、雜海藻やハバ海苔の屑を細かに刻んだものとふかし藷とを混ぜ合せて撒餌に使ひます。

ハバ海苔は干潮の時には自分でも採取できない事はありませんが、初めて行く人は漁師を賴んで採つて貰つた方がよいでせう。

漁師の家にはよく食用として乾燥したものがあり、それを頒けて貰つて行つて、海水に浸して使つてもよいのですが、やはり新鮮なものに如くはないのです。なほ此のハバ海苔の事を德島地方ではメンソといひ、島根縣ではカシカメといつてゐるさうです。

此の海苔餌釣の季節は、冷え込みの早い年には十一月下旬頃からはじまりますが、その頃には海苔の新芽がまだ小さいので、採取がかなり困難です。普通は十二月中旬頃から翌年二月下旬、三月の上旬には大概終りますが、その終り頃になか〳〵面白い釣ができるのです。その頃には海苔が磯から枯れ落ちるので、魚がそれを爭ひ喰ふ爲でせう。

附錄、鈎果の料理法

釣の獲物をどう處理したらよいかといふことも、釣人として一應心得て置かなければならないことでせう。思はぬ大漁に惠まれた時などは、家族は勿論のこと、友人、先輩、隣組などと喜びを頒ち合ふことも結構です。それでもまだ喰べきれないといふやうな大漁が、時にはないこともありますまい。それを無理に一度に始末してしまふなどは、甚だ勿體ない話で、それではカロリーが一度に燃燒してしまつて、思つたほどの榮養が殘らないといふことですから、なるべく幾日にも分けて賞味するやうにしたいと思ひます。さうかといつて同じやうな魚を、同じやうな料理で喰べるのも能がなく、鯛の刺身も三日喰べれば飽きるのたとへの通り、色々と料理法を變へて喰べたいものです。又夏期などはすぐにいたみ易いこととて保存法も一應心得て置かなければなりますまい。それらに就いて私の素人料理の智識を參考までに追記して置くこととしました。

生魚料理

生魚（なまうを）料理といへば先づ刺身を考へますが、これは魚のおろし方の巧拙で多少味にも影響しますけれど、その邊は素人料理のこととて我慢して貰ふとして、特にむつかしいこともないのですから省き、「あらひ」の料理法から記しませう。

「あらひ」は最も夏向きの料理です。これに最も大切なことは、魚が新鮮でなければならない

こと、活魚をしめて直ちにつくることが理想です。刺身よりは薄目に身をそぎ、直ちに冷水の中に浸して洗ひ上げると、新鮮なそぎ身はちり〳〵と縮れ上ります。これを氷の上に並べて供するわけです。

黑鯛、鱸などの海魚はわさび醬油がよく、鯉、鮒などの川魚は酢味噌で喰べるのがよいやうです。然し、鯉や鮒には「肝臟ヂストマ菌」の危險があるので、産地によつては避けた方が安全でせう。で、その場合は關西風の「てつづくり」といふ料理法をすゝめます。

關西で刺身のことを「おつくり」といふことは御存知でせうが、「てつ」といふのは鰒の變名で、鰒ちりのことを「てつちり」などといひます。これは鐵砲ちりの省略で、鐵砲は當るから鰒の變名にとりあげたのだといふことです。

この「てつづくり」は薄くそぎ身にしたものを、味噌こしざゝのやうなものに入れ、一方に湯をぐら〳〵沸らせて置き、その中にさるごと浸してさつとゆがき上げるのです。中まで熱が透り過ぎてはいけません。ほんの二三度ゆがく程で直ちに上げ、それを今度は冷水の中に入れて洗ひ上げるのです。海魚をかうするのもよいもので、多少鮮度が失はれた魚でも、立派に「あらひ」の代りをつとめてくれるものです。

和へ物

和へ物（あへもの）にするのには、魚肉を前記のそぎ身にしてもよければ、ぶつ切でもよろしい。刺身や「あらひ」にならないやうな部分を使つて十分です。それにざつと薄鹽をふつて置き、一方に胡麻なり、南京豆なり、くるみなりをすり鉢でよく磨りつぶしたものに、適宜に砂糖・醤油を加へて味をつけ、その中に前の魚肉を入れて混ぜ合はせるのです。好みによつては味噌を混ぜてもよろしい。それに葱や紫蘇、わけぎ、しゆん菊、ほうれん草、みづ菜などの青味を加へて和へるのもよいものです。これらは一度茹で上げたものを、適宜に切つて混ぜること勿論です。

又魚肉を酢味噌だけで和へたものを「ぬた」といつてゐますが、これには葱かわけぎをよく茹でて加へるのが常式です。此のぬたに似た料理で「肝和へ」がありますが、榮養料理として是非すゝめたいと思ひます。

「肝和へ」（きもあへ）、は同じ魚の肝臓をすりつぶして和へるので「友和へ」などともいはれてゐますが、肝臓をよく水洗ひしてからサッと熱湯でゆがき、これをすり鉢に入れて味噌、醤油砂糖、味淋などで好みの味をつけ、一しよによくすり混ぜたものの中に、同じ魚の肉を入れて和へるのです。海魚では鮟鱇、かわはぎなど肝の大きい魚をよく用ひますが、川魚の鯉や鯰なども悪くありません。

それから肝の代りに魚卵で和へるのもすばらしいもので、これを「親子和へ」といつてゐます。鮭の子のやうな大粒の卵よりも、鱈の子のやうな小粒の方が適當で、鯉や鮒の卵もなかなか乙なものです。白子の場合は肝和へと同じやうにすり鉢ですりつぶして味をつけますが、眞子（まこ）の場合は卵嚢から出してばら〳〵にしたものを、前記調味料でよく混ぜて和へるのです。見た目にもよく、榮養百パーセントの美饌といふことができませう。

魚田とむし燒

鹽燒、つけ燒はわざ〳〵記すまでもありますまい。料亭でてり燒といふのは、砂糖醤油でつけ燒にするのを、特に味淋を利かせて燒き上りに照りをつけるだけのことです。味噌をつけて燒く料理を魚田（ぎよでん）といひますが、これは魚の田樂を略したもので、いきなり生魚に味噌を塗つて燒いたのでは、味噌ばかり焦げて魚に火が透りませんから、先に魚だけ白燒に燒き上げ、その上に味噌を塗つて表面が多少焦げる程度に燒くのです。味噌は前以つて砂糖、味淋などを加へて磨つて置き、季節によつては山椒の若芽、紫蘇の葉などを磨りこんだりします。燒き上つた上に芥子の實か白胡麻でもパラリと振つて置けば、一層見た目の食慾をそゝりませう。

關西料理に「寶楽燒」といふのがありますが、これは素燒の蓋のあるほうろくの中に、魚をならべて蒸燒にしたものです。先づほうろくの中に綺麗に洗つた小礫を敷きつめ、その上に松

葉などを並べて十分に鹽を振り、それに魚を並べるのです。魚にも勿論鹽を利かせます。そして強い火にかけますと、小礫が燒けて魚が蒸燒になり、松葉の香が移つてなか〳〵よいものです。これをほうろくのまゝ膳に供し、ポン酢か橙酢をつけて味はふので、客のある時などに是非やつてみて下さい。

私は、これを溪流釣の河原料理に應用して、若葉むしと名づけてゐます。二三人で溪流釣に行く時には、よく飯盒を用意して行きますが、炊事にかゝる前に、釣果の山女魚や岩魚の腸をぬき、よく水洗ひして薄鹽をふり、季節の若葉、例へば蕗とか柏とか熊笹とかいふ大きい葉で魚を卷き包みます。そして河原の石を積んでかまどを築く時、底の小石をかきのけて綺麗にならした上に、此の若葉で包んだ魚を一側並べに敷いて、その上になるべく平たい小石を若葉がかくれるくらゐに敷きつめます。そしてその上で火を焚いて飯盒炊事を用ひ、御飯が炊けたら殘火で茶を沸かし、すつかり火が沈んだところで灰や小石をかきのけ、若葉で包んだ魚を取り出すのです。葉をほぐしてみると魚はほとんど焦げず、元の姿のまゝ蒸し燒になつてゐて、若葉の香がしみこみ、なんともいひやうのない珍味です。これをお采に河原で味ふ晝食こそ、釣人にのみ與へられた天の美饌といふべきでせう。

吸ひ物と魚こく

魚を入れた澄まし汁の吸ひ物は、魚を入れてからあまり煮立てゝしまつては、魚そのものゝ味が失はれるばかりでなく、汁が濁つて味が濃くなりすぎますから、他のダシで汁を造つて置き、後から魚を入れてさつと煮立てるくらゐの方がよいでせう。殊に鯛のうしほ椀などは、折角の鯛がダシがらになつてしまふばかりか、うしほ椀の持つ淡楚な感じが失はれてしまひます。先に薄味のダシ汁を造つて置き、それが沸き立つたところへ、薄鹽をして置いた鯛の頭なり、肉なりを入れてさつと煮上げる程度がよろしい。

それに反して味噌椀の方は、初めから魚を入れて煮立てた方がいゝと思ひます。鯉こく、鮒こく、ぼらこくなど、何れも生魚をぶつ切にして投げ入れぐつ〳〵煮上げるくらゐにした濃脂の味に特長があるのです。鯉と鮒とは鱗つきのまゝぶつ切にして煮立て、鱗のぷり〳〵した齒さわりに獨特の風味があります。

味噌椀にしないでも、特に濃脂な汁を好む家庭では、白菜だの、葱だの、蕪だのといふ野菜類と一しよに魚肉を入れて、ちり汁にして味ふのも冬向きにはよいものです。私はこれに後から小麥粉を水溶きして加へ、胡椒で風味をつけて魚のシチュウを造らせますが、これも惡くありません。此の場合は醤油で味をつけず、鹽味だけの方がよいと思ひます。

天ぷらと唐揚げ

天ぷらの揚げ方は大體御存知と思ひますが、衣が齒にからむやうでは美味くありません。それは粉を水溶きするとき攪き混ぜすぎるからで、むしろ粉の粒が多少殘る程度に、ざつと攪き混ぜて置いた方が、からりと揚つて旨いのです。魚肉は揚げる前によく水を切つて置かないと、油がはねて思はぬ火傷を負つたりします。貝類や烏賊を揚げる時は、衣をつける前に一度乾いた粉にまぶせてからにすれば、油がはねないばかりか衣と身と離れる事もないのです。

唐揚げは揚げる前にやはりよく水を切り、薄鹽をしてから片栗粉をまぶせ、それを沸き立つた油の中に入れないとカラリと揚がりません。魚を骨つきのまゝ一尾ごと揚げる場合には、腸をぬいてよく水洗ひをし、皮膚に二三ヶ所庖丁の切目を入れて、中までよく火の通るやうにしてから、薄鹽をして二三時間頭を下につるして置きます。さうして十分水氣を去つてから揚げるのですが、揚げる直前にやはり片栗粉をまぶせます。

この唐揚げを三杯酢で喰べてもよければ、味淋と醤油でタレを造り、それに片栗粉を溶かして火にかけ、とろりとしたあんにしてかけて味ふのもよいでせう。葱や白菜、人蔘、筍などを刻んで煮込み、甘酢を加へてから片栗粉を溶かしこんであん汁を造り、その中に鯉の唐揚げを入れてもう一度火を通せば、支那料理の「紅燒鯉魚（ホンチユンリーユ）」が出來るのです。鯉に限つたことはありません。海魚でも、鮒でも上等です。鮎や山女魚なら一層よろしい。

南蠻漬

唐揚げのついでに調法な南蠻漬の料理法を紹介して置きます。先づ酢に味淋を加へて、煮立て、これに輪切に刻んだ葱と唐辛子を藥味に入れて漬汁を造ります。次に小鮒だの鯉だのなら丸のまゝ、鰺、鯖、鮎のやうな大きさの魚なら六七分のぶつ切にして薄鹽をふり、半日ばかり乾してから唐揚げにして、揚げたての熱いところをそのまゝ前記の漬汁に投げ入れるのです。此の場合は片栗粉をまぶせて揚げる必要はありません。

これをすぐ喰べてもよし、直ちに瓶か壺のやうな器に入れて、しつかりと紙で目貼りでもして置けば、三月も半年も保存がきゝますから、時々とり出して味ふのに調法この上もありません。私は秋刀魚の豊漁期に澤山買ひ入れて漬け込んだものですが、翌年の五六月頃まで賞味することがありました。ビールの肴などには頗る結構です。

小鮒や鯉、モロコ、オヒカハなどの小魚でしたら、唐揚げでなく素燒にして漬けても、結構二三ヶ月は喰べられます。さういふ小魚類を色々とり混ぜて漬け込むのも、喰べる時に別な樂しみがあるものです。同じ日に同時に漬けなくとも、一週間や十日漬ける日が違つたところで差支へありません。

又漬け汁の中に大根や人蔘などの野菜類を千切りにして混ぜるのもよいものですし、喰べる

時に太根おろしを添へてすゝめるのもよいものです。釣人料理として是非すゝめます。

スツポン煮

魚を油でいためてからこつてりと煮附けた料理を、スツポン煮といつてゐますが、どういふわけでさういふのか理由はまだ知らないのです。特に鯰のスツポン煮は旨いものですが、臭味の特に強いやうな魚、たとへば鯔などを味ふのには適した料理法でせう。鯉、鮒などの川魚にも向きます。

これは魚の鱗を除き、腸をぬいてから骨のまゝぶつ切りにして、揚げ鍋に底がかくれる程度に油を入れて火にかけ、熱くなつたところへ前記の魚を投じてよくいためるのです。十分にいためたところへ、醤油に砂糖、味淋などを加へた煮汁を注ぎ込み、味附けをして煮上げるのです。濃い味を好む人には特に喜ばれる料理です。

魚すきとちり鍋

何れも元は關西料理ですが、今ではもう全國的にひろがつてしまひました。大阪の丸万が魚すきのタレを祕密にして、土藏の中に鍵をかけてこしらへるのだなどといふ話が、嘘か本當か傳へられてゐますけれど、何もそんな祕密のタレがなくとも、結構舌鼓がうてると思ひます。

魚すきに使ふ魚は中型以上のものがよく、三枚におろしたものを薄く切身にし、鍋にしゆん菊、葱、焼豆腐などと盛り合はせてすき焼にするのですが、獸肉のやうに煮すぎては魚の持味が消えますから、野菜類を敷いた上に魚肉を敷き並べて煮上げる程度がよいのではないのでせうか。贅澤をいへば一種類の魚でなく、赤身、白身、色々な魚肉を混ぜ合はせれば見た目にもいゝと思ひます。

ちり鍋は冬向きに何處でも歓迎され、鯛ちり、鱈ちり、鰒ちりなどと特に結構です。然し色色な魚肉を混用するのもいゝもので、釣人にはそれができないことはないと思ひます。魚肉はすき鍋と違つて、あまり大きい魚でない限り、三枚におろすよりぶつ切の方が、鍋の中でこわれないでよいと思ひます。

先づ鍋の底にダシ昆布を敷いて湯を注ぎ、暫く煮立つて昆布のダシが出たところへ、つけ合はせの野菜類と一緒に魚肉を入れるのです。野菜は白菜、葱、しゆん菊、ほうれん草、みづ菜等何でもよく、それに豆腐でもあれば申し分ありません。肝の大きい魚は是非肝を入れませう。榮養價もぐんと高まります。

さて、これを汁ごと小丼か椀にとり、酢醤油を注ぎ込んで喰べてもいゝですが、大根おろしに生醤油を注ぎ、橙か柚子を絞り込んだものを造つて置き、煮上つた魚や野菜を摘み出してつけて味ふのもよいものです。その時には別に湯呑み風の器を用意して置き、これに煮出し汁だ

けを掬ひとつて、生醤油か酢醤油で味をつけるか、或は鹽を振りこむだけでも、あつさりしてなか〳〵美味いし卽席の魚肉野菜スープとして味はへます。

燒干しと甘露煮

燒干しは燒枯らしともいひ、鯊や鮎を保存するのに用ひる方法ですが、山女魚や岩魚にも上等ですし、ウグヒ、モロコ、オヒカハなどに應用してもよろしい。暖かい季節には腸をぬいて白燒にし、それを乾し上げるのですが、晩秋以後なら腸持ちのまゝ燒いても、充分保存がきくでせう。

燒き方は魚串にさして、ぢかに火に焙つてもいゝですが、理想的には火の周圍に頭を下に向けた魚串を立て廻らせ、火鉢の上に覆ひをして蒸燒にした方がいゝのです。魚が焦げないばかりか、火も中までよく透ります。さうしてよく乾燥させて保存し、ダシに使つてもよければ、甘露煮に煮上げるのもよいでせう。

甘露煮は鍋の中に燒干しを丁寧に敷き並べ、水を十分に注いでとろ火にかけるのです。急いではいけません。一晝夜くらゐとろ〳〵と煮上げて、魚が軟くなつたところで味淋を入れるか、酒と砂糖を入れるかして、又暫く煮續けます。さうして十分に軟くなつたところで、はじめて醤油を加へて味をつけ、そのまゝ、又暫く煮上げるのです。醤油を早く入れると芯まで軟

かく煮上りませんから、その點を特に注意して下さい。かうすれば骨は勿論、頭までもほとんど齒ざわりなく味はへるのです。

鹽乾魚の製法

獲物を簡單に長く保存するのには、干物にして置くのが最上です。先づ魚を背開きにして鰓や腸をとり去り、よく水洗ひをしてから一夜鹽水に浸して置くのです。生鹽を振つただけですと、鹽が餘計に要るばかりでなく、鹽味がむらになつて一樣にしみ込まぬ爲、夏期など兎角いたみが早いのです。深い器の中に鹽水を造つて置き、その中に背開きの魚を重ねて入れ、そのまゝ一夜置いて、翌朝陽に乾すのです。一鹽干しでおいしく喰べるのには鹽水を薄めに、カラカラに乾し上げて長もちさせるのには、濃い鹽水を用ひます。

江戸つ子好みの「くさや」の干物は伊豆七島の特産ですが、その昔交通の不便であつた頃、鹽の供給が不自由がちであつたのに對處して、島の人々が考案した鹽乾魚なのです。卽ち鹽が十分に入つた時、樽いつぱいに鹽水を造つてしまひ、捕れた魚を次々と同じ鹽水に浸しては乾したものなのです。さうして何ヶ月も何年も同じ鹽水に魚を浸すので、終ひには魚の血や膠分がその中に溶け込んで、臭いくさや汁が出來てしまつたわけなのです。今ではそのくさや汁が島の漁家の寶物になつてゐるさうです。不自由な島の生活者達が、窮餘の策として案出した方

法が、今では伊豆諸島の特産となり、市場の價値を高めてゐるといふわけです。

それから魚の味淋干しが美味しいですが、あれは鹽水の代りに醤油で加味した味淋汁をつくり、その中に一夜浸して乾すのです。これも市販されてゐるやうなカラ〳〵乾しより、家庭作りの生乾しの方がどれ程美味しいかしれません。

味噌漬と粕漬

魚を味噌や粕に漬けるのにも、生魚をそのまゝ漬けず、一度薄鹽にして二三時間寢かせて置き、鹽が馴染んだところで漬け込むのを理想とします。鰤(ぶり)、鰆(さわら)、鯛など大き魚は三枚か二枚におろし、切身にして漬けますが、鮎、山女魚などは腸だけぬいて、腹の中にも鹽を振り、味噌なり酒粕なりをそのあとにつめ込んで、丸のまゝ漬けるのです。漬ける味噌や粕は味淋で多少うすめて用ひ、味淋のない時には酒でうすめてもよろしい。

夏期は漬けた翌晩から喰べられますが、冬期は三四日後からがよく、夏期はせい〳〵で一週間、冬期は半月くらゐ十分に保存が利きます。私は初夏の鮎釣にはよく前以つて酒粕を樽づめにして釣場へ送つて置き、釣果をその夜漬けこんでしまひ、翌朝荷造りをして留守宅に送りつけたりしたものですが、鮎を釣場から鮮度を落さずに送るのは、最もよい方法だと思つてゐます。

腸はその場で壜につめ、鹽づけにしてうるかにして持ち歸ります。

鹽辛の製法

烏賊と鰹の鹽辛は最も大衆的ですが、鮎のうるか、落鮎の子うるかなど、珍中の珍味といへませう。鹽辛は鰯のやうに腸のきたない魚は別として、他の魚でも美味しくできるのです。

鹽辛の製法は極めてやさしく、烏賊ならば身を細く短冊に切り、黄わたと一緒にして鹽を十分に加へ、よく攪き混ぜて瓶や壺に漬け込むのです。鹽の分量は内容の半分といはれてゐますが、當節は鹽も不如意がちのことと、三分の一でも相當に長保ちします。保存するのには容器の口をしつかりと塞ぎ、紙で目貼りをして置くのです。

鮎のうるかや子うるかも製法は同じで、本當に美味しくなるのには、二ヶ月以上寢かせなければいけませんが、早く喰べるのには漬け込む時燒火箸で何回も攪き混ぜるとよいさうです。鹽を早く馴染ませる爲でせう。

糀漬の鹽辛は、それに糀を水溶きしたものを混ぜればよく、烏賊の白づくりを造るのには、烏賊の身の薄皮を丁寧にはがして、腸を加へずに漬ければよいのです。薄皮と肉との間に色素がある爲、獨特の色がつくのですから、薄皮をはいでよく水洗ひすれば、白い美しい鹽辛ができます。黑づくりは烏賊の墨を混ぜて色をつけるのですが、少量混ぜただけでかなり黑くなる

ものですから、あまり入れすぎないやうに注意して下さい。

鮎のうるかは腹こわしと指腫物の妙薬です。私は豆飯などで腹をこわしても、薬などほとんど用ひず、うるかを一つまみべろりとやると、そのまゝ次の食事に豆飯を續けても平氣なのです。腫物には貼り附けるのださうですが、まだ自分で用ひた經驗はありません。

検印

鈎の季四

昭和二十一年八月一日印刷
昭和二十一年八月五日發行

(特)定價金二十圓(稅共)

著者 益田甫

東京都京橋區銀座西七丁目一番地

發行者 株式會社右文社
代表者 久保平三郎

東京都立川市曙町三丁目五五番地

印刷者 株式會社行政學會印刷所
代表者 大谷保

東京都京橋區銀座西七丁目一番地

發行所 株式會社右文社

會員番號A一二五〇一三號
振替東京三〇〇〇〇番
電話銀座六六〇—六六三番

東京都神田區淡路町二丁目九番地

配給元 日本出版配給株式會社

右文社の隨筆

近刊豫告

望妖記 ¥18 佐藤垢石

お蝶夫人 ¥15 三浦環

魚に會ふ ¥20 岸浪百草居

樂屋ばなし ¥15 古川綠波

應豫約申込

平和と幸福の新日本建設は一心ちひ　てんはは聯のかをやゐ、だか、今なほ工程がなかなか隨とらつし。くがらないうつろな荒筆しねたく、手付やはびこつの糧へ持さる行魂と街にた眞の日本人にたらつた暗い翳をなげ強く、うるほ明朗豁達なの隨筆集を世に贈る。

續刊執筆陣

平岡養一　小杉放庵　石井漠　藤原義江　木村義雄　古賀政男　井上正夫

右文社　東京都京橋區銀座西七ノ一

787.1
MA66

終